



287号
新宿発

今こそ灯をともそう

最後の賭け サダム・フセインに直訴

寺沢 潤世

イスラエル潜入記Ⅰ

私が見た「カベ」

永井 徹男

キリスト教会のセクハラ裁判に関わって

澤田 和子

女の選挙をたたかって

吉田貞子・星野邦子・広岡立美・清水絹代・吉川富士子

女の知事選に思う

小出菜津子

朝鮮半島と日本の平和を考える

北川 広和

「在韓米軍」に抵抗する韓国の人びとⅠ

芦澤 礼子

沖縄Ⅱ女性はいきいき・映画演劇花ざかり

桑江テル子

今こそ灯をともしよう

表紙 美瑛の空

心に灯をともしよう	1
最後の賭け サダム・フセインに直訴.....	寺沢潤世 2
イスラエル潜入記Ⅰ 私が見た<カベ>Ⅰ	永井徹男 34
意見・異見 キリスト教会のセクハラ・人権侵害裁判に関わって.....	澤田和子 44
女の選挙をたたかって	
日本を変えるか? この思い.....	吉田貞子 50
小さな力でも将来に繋げたい.....	星野邦子 52
二期目の選挙、石川県議会の場合.....	広岡立美 54
選挙を終えて.....	清水絹代 56
県議会の無投票阻止をして.....	吉川富士子 59
朝鮮半島と日本の平和を考える.....	北川広和 64
「在韓米軍」に抵抗する韓国の人びとⅠ	芦澤礼子 76
沖縄から 女たちもいきいき・映画演劇花ざかり.....	桑江テル子 84

■めじゃーなりすとのめ 埼玉県・知事選に思う	小出菜津子 62
■語りかけたいあなたへ 55 マヨラー	大里知子 86
■あごら読書室『声なき声を聞け』/『韓国の若者を知りたい』	88
■TOPICS 日本政府は遅れていると国連が指摘/ この秋も世界共同平和行動/ 女子 の大学生百万人時代に。就職率は過去最低 ほか	91
■あごらのあごら あごらの運営委員を募集中 ほか	96

今こそ灯をともしよう

自殺者は年間三万二千人。犯罪も増加し、凶悪化した。

株価が騰がり、大手企業の景気は回復したとは言え、零細中小企業は依然として苦しい。そこへアメリカからイラク派兵の奉加帳が回ってくるという。小泉首相は「二〇〇五年十一月までに改憲案策定を」と指示した。

八方、明るい話題に乏しい今だからこそ、心に灯をともしたい。

イラク攻撃阻止に、世界が挫折したとき、寺沢潤世上人は、ひとり世界各地を飛び回っていた。サダム・フセインの自主的退陣。夢かもしれない願望に最後まで賭けた。

「考えたこと、思ったことは実行する」という日常の信念が行動を支えた。

上人は言う。「憲法九条を葬るのは保守政権ではない。日本の国民全体だ」と。「あれだけの人財を喪い、アジアの国ぐにを犯した罪に立つ歴史的な教訓が、何一つバックボーンになり得なかった。その弱さが、今まさに噴出してゐる」。

アメリカが悪い、北朝鮮が悪い、とだけ言っていたのでは、未来はない。戦後五十八年、「あの戦争」に至った経過にも、「あの戦争」で犯したもうものの罪にも、私たちはまだ、向き合っていない。やがて強制されるであろう戦費を政府が受諾するとしたら、それは、その原資となる税金を払ってきた国民の責任でもある。

セクハラ訴訟をたたかい抜いたひと。女性が地域の選挙に一人も立たないことを憂慮して立ったひと。勝利の、あるいは敗北の後に、新しい祈りに燃えているひと。「米軍基地とたたかう韓国の友人」、「イスラエルに永い抵抗を続けるパレスチナの人びと」。——この号の記事の一つひとつが、心に灯をともしることと信じる。

サダム・フセインに直訴 イラク攻撃回避に最後の賭け

寺沢潤世

日蓮宗妙法寺。太鼓をうち鳴らし、南無妙法蓮華經を唱えながら、黄衣の上人は、世界各地を歩く。

十二年前の湾岸戦争では、サウジ・イラク国境に、ピーステントを張り、世界の

平和活動家と身を挺して侵略阻止を計った。上人の行動は、一貫して非暴力。

紛争の現場に赴いて、祈りながら歩き、語る。南アジア・西アジア・ロシア・

チエチエン・アメリカ・イギリス・イタリア……。一国のトップ層から路傍の

庶民まで、広い人脈に働きかけて、今度のイラク侵略も、何としても阻止しようと。

七月の末、風のように帰国された一夜、この二年間の非暴力平和活動のお話をうかがった。

主催の『チエチエンニュース』の「好意で、その一端を紹介する。」

キリスト教の教会まで攻撃されたパレスチナ弾圧

お久しぶりです。一週間ばかり前に日本に帰ってきましたが、明日、韓国に向かい二週間ばかり滞在したあと、中央アジア、中東、それからイギリスに赴き、年の暮れごろにイラクに入る予定です。ここ、



数か月前に中東、中央アジアを遊行^{ゆぎょう}して感じたことを、皆様方と分かち合いたいと思います。

いま「平和活動家」というご紹介をいただきましたが、少しそぐわない気持ちはあるのです。私は仏弟子として、人びとの中に入って祈り、歴史も文化も政治的な状況もさまざまな中で出会う人びとと共に、世界の共通した理想を見出そうと祈り続けている人間です。きょうは、テロ活動という観点で、今、私たちが直面しているたいへん大きな問題を、これが善であるとか、これが悪であるとか、という形を取らずに、考えたいと思います。

昨年は、パレスチナの一回の自爆テロに対して、その地域全部を「見せしめ」という形で制圧するイスラエル軍のプレアクティブ・パニッシュメント——先制懲罰攻撃が続くなかで、ベツレヘムのイエス・キリスト聖誕教会に、一か月以上にわたって攻撃が続いたことがあります。世界の三大宗教の最も大切な聖地で、パレスチナ支援を理由に武力行使、流血の惨事があった。国連人權委員会で、その問題が一番大きな山場にかかったとき、戒厳令下のベツレヘムで何人かのお坊さんと一緒に太鼓を打って、聖誕教会の前の広場の入れる所まで入ってお祈りを続けました。

パキスタンとインド——一触即発の危機

その直後、もう一つの大きな危機がございました。パキスタンとインドの軍事対決です。双方とも核兵器を所有して、パキスタンは短距離・中距離ミサイルの実験に成功、国境ぎりぎりの所にまで一〇〇万という大軍を動員、臨戦体制にありました。中距離核ミサイルを双方が配備することによって、わずか二、三時間のうちにお互いがお互いを破壊できるというぎりぎりのところまでいったわけです。

ヨーロッパに中距離核弾頭ミサイルが配備されたときは、高度なガイディング・システムによる一〇〇発一〇〇中に近い命中度でしたので、先に敵方の核能力を叩くことによつて敵の核攻撃能力を一挙に壊滅させることができるようになり、向こうが叩く前にこちらがやらねばという悪循環が起きた。核攻撃を実行すれば小一時間もかからずお互いに全滅するわけです。そこでヨーロッパでは、核戦争をとどめる運動が、ほうふつとして湧き起こり、それが、ヨーロッパの中で東西冷戦体制を終結させる一要因となった。つい十五、六年前のことですから、皆さんもご記憶だと思えます。

相互にエスカレートする疑心暗鬼の中で

パキスタンとインドの場合には、それだけの命中度のあるミサイルがあるわけではない。双方の間のホットラインもないので、一〇〇万の軍隊が目と目の先でにらみ合つて、ちよつとしたいざこざがすぐ撃ち合いになっていく。双方の疑心暗鬼が最高値に達するわけです。どちらが先に核兵器に手をつけるか、双方とも確認できない。今、飛行機が飛んでくる。その飛行機に核爆弾が搭載されているかどうかを確認できない。ミサイルが飛んで来ても、それが核ミサイルか通常のミサイルかも確認できないなかで疑心暗鬼が最高潮に達する。そのなかで、先に核兵器を使つて、向こう側が立ち直れないぐらいやつつけたほうが勝ちだという状況になったわけです。

こんなときにインドの国防大臣が、「パキスタンが核攻撃をしても、インドは何百万かの人殺されるかもしれないけれども、それはそれで受け入れられる。その代わり、攻撃をされれば、インドはパキスタンに全部報復していく」と正式に声明を出した。その国防大臣は、今では数少ないマハトマ・ガンジ

一の直弟子の一人ですが、残念なことに、そういうことを言い放ってしまったのです。

マハトマ・ガンジーの命日に祈る

そういう極限状態のときに、パキスタンとインドの政府の双方に、十何名かのお坊さんが、平行行進をして働きかけました。ロシア、ウクライナ、カザフスタン、キルギスタン、そしてチエチエンの兄弟が二人、そして日本人の私。何か国かの宗教者が、ぎりぎりのせっぱ詰まったとき、市民レベルでの平行行進をやり遂げた五日後、インド政府は突然、北はヒマラヤの万年雪の場所から、アラビア海に至るまで、何千キロもの国境に、陸・海・空、全部がとつていた臨戦体制を一応解除すると、発表しました。その間に、パキスタン側でもインド側でも、政府の要人に会見する機会がございました。

インドではマハトマ・ガンジーの誕生日には例年、大統領、副大統領、首相、国防大臣、野党党首、みんな集まって、ガンジーのお墓の前でお祈りをします。インドは多宗教の国でして、いろいろな宗教がございます。全部の宗教の祈りがあるんですが、私どもも、インドが独立する前から、私どもの師匠がガンジーと寝食を共にして、インドの非暴力運動を祈ったというつながりがあるがゆえに、ガンジーの生存のときからの恒例で、太鼓を打って、「南無妙法蓮華經」と、ガンジーのご命日に祈り続けています。大統領・首相以下全員の目の前に座って、太鼓を打ちますから、首相や国防大臣に、私たちのレポートを直接手渡す機会があるわけです。

パキスタンから祈り続けてきた私どもが、パキスタンの国境を越えてインドの村々を歩く間、インド内務省の秘密警察が密着して、われわれがどこに行った、どこでお茶を飲んだ、誰の家に行き、どこ

お寺に泊まり、こういう話をしたかということ、全部レポートして、ビリビリしながら、私どもの言動を観察しておりましたが、ご命日のお祈りのとき、首相に手渡し、必死で話することができました。

印パ一触即発の中で平和行進

私たちがパキスタンを歩いているときは、まさにアメリカとパキスタンが、歴史始まって以来の緊張関係にありました。アフガニスタンのタリバーン一掃作戦で、アルカイダやタリバーンの主要級のかりの人たちがアフガニスタンの国境を越えて、パキスタンの国境地域の部族地帯に来ており、双方の軍の情報機関がベシヤワル近辺、アフガニスタンの国境地帯に集結していました。ここは、パキスタンの建国以来、パキスタンの国軍が入ったことがない部族地帯ですが、その中にパキスタンの国軍が入って、首領を捕えるせん滅作戦をやっている。その最中の、一番危険な所でした。

部族地帯ではほとんどの民衆はタリバーンのシンパで、オサマ・ビンラーディンがヒーローなんです。それがバシュトゥンという部族の感覚なのですが、パキスタン政府は、ここにアメリカ軍を入れて、これまで同盟国であったタリバーンに対する戦争に、一番中心的な形で協力したのです。

バシュトゥンがそれに強く反対していたその時に、私たちが乗り込もうとしたわけですから、覚悟の上とは言え危険は限らない状況でした。私たちがいる間にも、三度、外国人をアタックするテロ行為がございましたし、キリスト教系の学校や教会が襲撃されたという話もございましたが、私どもは、そういう時だからこそ平和行進をと、紀元前後にかけての仏教の一大聖地、ガンダーラにおもむきました。その聖地から、平和行進を開始したいと考えたわけです。

八月六日 平和行進開始の予定が

ガンダーラにはもちろん許可を得て入ったのですが、われわれはそこで足止めをくいました。異教徒である仏教徒で、しかも外国籍であるわれわれが、護身の道具も持たずに、パシュトゥンの中に入っていけば、「テロをしてくれ」というのと同じことだ、と幽閉されまして、足止めをくったわけです。

私たちは八月六日の広島の日から始めようと来たのです。初めて直面する核戦争の危機に対して、広島・長崎の教訓を訴えようということで平和行進をする。だから八月六日に出発することに意義がある。ところが、行つてみると、タキシードという素晴らしい仏教遺跡にある特別の客室に、われわれは全部、幽閉されました。広大な敷地全部が、一〇〇人近くの黒装束の軍によつて囲まれ、その敷地から一歩も外に出られない。そしてそのことが、インドにもパキスタンにもトップニュースで知らされたのです。八月六日には何としても行進を開始すると、強硬に外務省や内務省に交渉して来たのに、三日間足止めをくった。その三日間の間に、われわれが足止めをくっている施設から数キロ離れたキリスト教の病院のチャペルが、お祈りの最中に爆撃されたのです。看護婦さんや、尼僧さんが亡くなった。ですから、パキスタン政府のわれわれに対する心配というのは、根拠のないことではない。当然のことなのです。けれども、粘り強く交渉して、ついにベシヤルという、アフガニスタンの北西辺境に隣接する所に行くことを許可していただいた。しかし、すべての場所を歩くのはやめてくれ、主要な地点を車で移動してくれ、と。しかも護衛の兵隊をつけるというのが条件でした。われわれ十二名は非暴力を訴えて歩くのですが、仏教のお祈りを守るために、対テロ特別部隊がついたのです。黒装束の、テロ撲滅の専門

の兵隊が五〇名も二十四時間体制で守ってくれた。まったく異様な非暴力の平和行進でした。けれども、それでもやはりやり遂げたいということでもやりました。それが去年のことです。

仏教徒の祈りに感謝するムスリムの人びと

そのときは、すでにイラクに向けて湾岸にアメリカ軍の集結が始まろうとしておりまして、ロンドンのBBCが電話インタビューに来ました。「ベシヤワルに来て、敵陣の中に入って、どう考えさせられていますか」という質問でしたが、兵隊も含めまして、会う人すべてが、「あなた方がこうして核戦争を回避しようという呼びかけでお祈りをして歩いてくれるのは聖なる行為だ」と、ムスリムの人たちが仏教徒である私たちに、胸を開いて歓迎してくれるわけです。そして、われわれの命を守るために、五十人以上の兵隊が二十四時間体制でついてくれたのです。

そういう人たちの隊長に、「ピンラーティンはどこにいるのか知っていますか」と冗談混じりに聞いてみました。すぐ隣の山の奥で掃討作戦をやっていましたので。すると、「知ってるよ。一〇〇人ぐらいつけて、毎日移動しているはずだよ」と言うのです。そんな真つ只中のすぐ近くで私どもが祈っている。それもパシュトゥンという、タリバーンのシンバが多い所です。ムスリムの聖職者たちが、ほとんどみんな、反現代・反西洋・反アメリカのジハードを、お祈りのあとのお説教で説く、そういう場所です。けれども、仏教徒のわれわれには、「聖なるミッションである」と言ってくれる。そういうふうに歓迎されていますということを、私はBBCのインタビューで言いました。

見た目ではまさに軍部の衝突が起きている。宗教の対立による核戦争が起きようとしている。インド

の政府は、ヒンズー至上主義者が権力の中枢を握っている。かつてマハトマ・ガンジーを暗殺したグループが、今はヒンズーの政權に座っているわけです。一方、パキスタンは、ヒンズーとムスリムという宗教の違いによって英国から独立したわけですが、それ以来、今日まで、どうしても平和にはなれない。その二つの国がそれぞれ核兵器を持つて核戦争の直前まできている。宗教の違いが核戦争にまで発展しようとしている。まさにその焦点に私どもは入ってお祈りをしている。そういう現実を一般の民衆や兵隊たちは、異教徒である私たちに対して、本当にあなた方がやっていることは神聖なことなんだというふうに受けとめる。そういう一面も忘れてはいけない。そういうことを私は認識しました。

ベツレヘムでもそうでした。聖誕教会に逃げ込んで籠城したのは、ムスリムとキリスト教のパレスチナの人たち、一〇〇名以上です。その教会の神父さんや牧師さんも彼らと連帯して、一緒に籠城していた。それを取り囲んでいるのは、ユダヤ教のイスラエル軍です。

宗教の違いを浮き立たせても問題は解決しないので、多くの人たちはこういう地域紛争は宗教とは関係がないのだ、宗教が本質ではないのだと言う。そういう見方も当然ですが、かといって、宗教の違いによつて憎悪と報復がいよいよエスカレートしていくという一面もあるわけです。それもはつきりと直視しなければいけない。けれども、一人ひとりの人たちに会つてみれば、黄色い衣を着て太鼓をドンドン叩いている、明らかに異教徒であることがわかる私たちも、神聖だとして心から歓迎する。そういう人たちの感覚が厳然としてある。そこに、世界の危機が今ここまで来ているけれども、その危機を乗り越える本当の感性、人びとの感性は、まだ失われてはいない、ということを経験したのです。

BBCのインタビュアーには、「あなたは今、ここであつてやっているけれども、それよりも勝るとも劣らない危機がイラクにあるじゃないですか。あなたはイラクに行つて歩くのですか」ということも

聞かれました。私は「大量殺戮兵器をいろいろな国が持つことをアメリカが非難する前に、アメリカ自らがこれほどの危機をつくってきたことを認識してほしい。広島・長崎に核兵器を使用して以来、今日まで、国連の常任理事国である五か国が核を保有し独占してきた。そういう見返りが、今、こういう危機をつくっていると、私はまず考える」と言ったうえで、「できればイラクの戦争が火を噴かないように、パキスタンとインドを歩いたあと、またパキスタンへ行きたいと思う」と答えました。

どうすればイラク攻撃を止められるか

その後、ワシントンに飛んで、一月十七日の反戦大集会に参加しました。それから一週間近くあとの一月の二十何日かに、二〇〇三年一番最初の国連安全保障理事会で、大量殺戮兵器を調べる国連チーム査察団からの一番最初の報告がありました。その間、国連の前でお祈りしていたのですが、祈りながら、どういうところの的を絞ってイラク入りを考えようかと、ずっと練ってはいいたのです。

国連の安全保障理事会では、大量殺戮兵器があるかないか、見つかるか見つからないかを論点として武力行使をすべきじゃないか、という論争がなされていました。私はワシントンの戦争反対の集会に出て、国連にも行って、宗教者としてわれわれはどう対処すべきであるか、祈るようにいろいろな人たちの意見をできるだけ聞きながら、宗教者として私たちは何をすればいいのか、どういう形で本当に具体的に戦争回避にもっていけるのか、その可能性があるのか、絞り込まなくては、と考え続けていました。

たまたまワシントンにいましたときに、インド共和国の独立記念日があり、アメリカのインド大使のレセプションに招待されました。そのレセプションの席上に、アメリカから地域ゲストとして来られた

アンダーステート・セクレタリー、国務省の政治問題を担当する国務次官補がいました。パウエルから四番目くらいのポストの方が地域ゲストとして来ておられた。これしかない、その人をつかまえる機会を狙っていたのです。そのために行ったようなものなのですが、その人の前に立ちはだかると目立ちますから、その人のスピーチのあとに、「近目中にぜひコミュニケーションを取りたい。イラク問題があります。これからイラクに行くつもりです。連絡先を教えてください」と、名刺をいただきました。

サダム・フセイン自主退陣の方策を練る

次に、インドの大使に時間をもらいまして、「私たちは世界の宗教者の合同のアピールを、これからイラクのサダム・フセインとブッシュ大統領に書こうとしている。われわれのアピールは、ただ戦争をやめてくれというだけでは具体性がないので、今のイラクの政権、サダム・フセイン大統領を、外側の圧力や、占領や武力行使によって変えるのではなくて、湾岸戦争以来、イラクの国が十二年間ずっと苦しみ続けてきて、国家存亡のぎりぎりのところに直面している今、イラクの政治指導者の最後に残る道義的責任を宗教者として訴えようと思っている。フセイン大統領に、自主的に退陣する意思を表明していただきたい。もしその意思があるならば、非軍事的な形で、しかも国際社会の支持の上で、戦争にならず、内乱にならず、平和裡に新しい政権が意思的な形でイラクに打ち立てられる、そういう手続きを国際社会の保障の上で履行する、その決意をサダム・フセイン大統領にしてほしいということを一応アピールの軸におき、そこに具体的に的を絞って私たちはイラク入りしようとしている」と伝え、インドの大使に、「あなたの意見を聞かせてください」とうかがったのです。彼は、「それはもうアラブのいろいろな

国もやっている。水面下でいろいろな国がそれを進めているけれども、どれ一つとして成功していない。イラクのリーダーが合意してもアメリカがのむという保障もない。恐らくやつても無駄だろう」という意見ではありました。けれども、私はもっと突っ込んで、「実はもしもイラク政権が自主的に退陣を決定するときには、公式ではなくても、インドはそれを激励する側に回ってくれないか。もしもイラク側が望むならば、インドが受け入れるというオプショーンも考えてくれないか」という話をしたのです。突然のことですから、インド大使は眉唾のように、「そんなことやれるわけではないし、考えたこともない」と、ぼけた顔をしておりました。

それをたまたま脇で聞いていたのが『ワシントンポスト』の女流コラムニストでした。とても有名な方だそうです。もうかなりの年ですけれども、特にアジア問題、今のイラクの問題を熱心に追っている方で、インド大使ととても親しい。その方がたまたま傍らで聞いていて、大使に、「そのアイデアはいいではないか」と、私の側についてくれたのです。「これはぜひやったほうがいい。インドだって、それを拒否しないで、受け入れたらどうか。今、インドとアメリカの関係はとても大切なところに来ていて、そういうことをインドがすればブッシュさんも喜ぶのではという面も、ないとはいえない。インドはパキスタンと本当に核戦争のぎりぎりまで来ているけれども、ムスリム国であるイラクのリーダーを助けることによって戦争が回避されるのなら、ムスリムのほうだってインドの外交を賞賛するのではないか。いろいろ考えてみても悪いことではないはずですよ」と大使に話しかけました。

インド大使は専門的な外交官ですから、約束はいつさいしませんでした。賢いですから何とも言いません。口を重たげに、いつさい意見を差し控えておりました。けれども、「引き続き、あなたを通して、われわれがやろうとすることに對する連絡は取りますから」という返事はもらいました。

ニューヨークには、国連がありますので、宗教的なNGOの本部がたくさんあります。一つは、日本の京都で発足した《宗教者平和会議》です。これは、仏教もキリスト教もイスラム教もユダヤ教もヒンズー教も、いろいろな宗教者が世界の宗教者と会話を通じて世界平和のために何ができるかを討論する会議です。いろいろ紆余曲折がある団体ではありますが、ここ四十年近く、宗教会話を通じて世界の平和を築こうと、努力しておられる大きな国際NGOで、本部は国連の前にあります。

もう一つは、《新二千年期のミレニアム・スミス》です。これは国連の総会に、世界中の宗教リーダーが、かつてないぐらい集まって、ニューミレニアムに対して宗教が一致協力して二十一世紀の新しい平和のために尽くそうという、とても素晴らしい内容の宣言を採択した団体です。私の友人が事務局をやっているのですが、その事務局もニューヨークにある。この二つの宗教NGOに、仏教だけではない、諸宗教が一緒になってイラクにピースミッションを派遣しようという相談をしました。両方とも、「基本的には全く賛成。それがやれるなら後方支援をしよう。密に連絡を取り合いましよう」ということで、ルートをつけました。そこまでの段取りはアメリカでつけて、ヨーロッパ大陸に渡りました。

ヨーロッパ大陸で一番最初に行ったのは、イギリスのケンブリッジ。そこで今教鞭をとっておられるキャノン・アンドリユー・ホワイトという、英国国教会のカンタベリー大僧正の中東特使として、ずっと中東問題をやってこられた牧師さんのところでした。この方が、前述のベツレヘムの聖誕教会の危機を無血解放させる一番困難な努力をなさった方。賽の河原の石を積んでは落とされるような苦勞をしながら、イスラエルの要求するパレスチナの十人近くをパレスチナに戻しなさいと、最後はそこに納めて解決した、その交渉の中心になった方です。その方が、なぜ中東の人びとにそこまでの信頼を受けるかというと、「イスラエルの武力行使も、パレスチナ側の自爆テロのテロ行為も、どちらも宗教の本質から

いつて受け入れられない」と、イスラムの神学者もユダヤのラビも、中東の聖地のキリスト教の神父も牧師さんも、エルサレムのキリスト教の司教さんも、みんな連名で宣言を出すことに成功した立て役者だったのです。9・11の直後、二年前のことでした。アレキサンドリアというところにみんなが集まって宣言を出したので、アレキサンドリア宣言といいますが、これは実に画期的な宣言だったのです。それを全部準備したこの方は、イラクの危機の間にも何度かイラクに行つて、イラク政府に交渉していました。私は彼のアドバイスとサポートをぜひ必要とするし、できれば、カンタベリー大僧正直々のサポートをもらいたい。それでケンブリッジに向かいました。

大雪のケンブリッジで

約束は夜の七時だったのですが、大雪で遅れまして、タクシーも何もない。そんな中でブルブル震えながらタクシーを待つて、遅れに遅れて、十時にやっとケンブリッジのお宅に着きました。十時というのは、アンドリユー・ホワイトさんはビールを飲んで待つていてくださったのです。

さつそくざつくらんにこれからのミッションについて彼の意見を聞きました。彼は、「あなたも知っているでしょうけれども、サダムはそういう人間ではない。今こゝまで来て、アメリカのプレッシャーで自分が辞めて、イラクに外国の軍隊を入れさせるなんて、自分のメンツを捨てるようなことは、あり得ないこと。彼の人格はそうなんだ。バアス党のイデオロギーはそうなんだ」と言うのです。だけれども、「行つてみるならやたらいいし、どういう展開をするか、私はずっと見守り続けたい。それから一人、ぜひ会つてもらいたい人間がいる。すぐ紹介する。彼とはイラクの問題をずっと一緒にやつてきた。

彼にぜひ会ってもらいたい」と、その人の自宅の連絡場所を教えていただきました。

その人は、湾岸戦争当時、サダム・フセイン大統領に対する国家安全保障を討議するセキュリティ・カウンセリング十人の一人で、リヤド空軍のトップだった人です。彼は湾岸戦争が始まる前に、サダム・フセインに、「アメリカ軍には太刀打ちができない、クウェートから撤退しろ」という進言をした人です。その人が亡命をして今ロンドンに家族共ども住んでいる。翌日すぐに会ってくれと紹介していただきまして、さつそく私の計画を全部ざつくばらんに話しました。「どう思いますか、そういうことをする意義がありますか」と。彼は言いました。「サダム・フセインは九九%聞かない。けれども1%の可能性がある。その1%は賭ける価値がある。イラクへの武力攻撃を回避する唯一の具体的な道筋なんだ。トライする価値がある。私自身がイラク人でなければ、あなたのミッションと一緒にいきたい」と。

その人はイラクのキリスト教徒なのです。もちろん、イラクにはたくさんさんのキリスト教のネットワークがあります。「イラクのキリスト教の人たちもみんなあなたの考えを支持する。アンマンにいるイラクのキリスト教の仲間に私はすぐ連絡をする。あなたのイラク入りを支援する。けれども、このアビールはあなたの方の名前だけでやってほしい。イラクの人の名前はいっさい出してくれるな。それをやれば、一族郎党、全部殺される。それが今のイラクなんです」と言いました。

サダムを立てればブッシュを利し、
ブッシュを立てればサダムを利す

私は、その彼の一言で半信半疑になりました。これは、いいことなのか悪いことなのか。平和運動の

人たちに聞くと、それは悪いことだと、ほとんどの人が賛成してくれませんでした。「これはブッシュのいうレジーム・チェンジ以外の何ものでもないから、ブッシュのちようちん持ちだ」というのです。ほとんどの人はそういう。けれども、アメリカの武力攻撃を回避するには、ほかにどんな方法があるのか。ほとんどの人は「国連の大量殺戮兵器の視察団がイラクにいる間、戦争はないんだ、それさえ押していけば戦争はない、イラク攻撃はない」という。そういう意見も私は尊重しますし、十分あると思うのですが、私の直感として、それではとても続き得ないと思ったのです。私の直感です。

もう一つは、アメリカの軍事攻撃を大量殺戮兵器の問題だけで阻止しようとする動きは、即そのままサダム・フセインの支持になるという意見。二極論ですから、そういう力学がある。しかし、それは宗教者として私は納得いかない。たしかに、サダム・フセインのプロパガンダに利することにもなるわけですが全面的にサダム・フセイン支持になってしまうのか――。

そこで、今度はジュネーブに飛びました。ジュネーブに行つて、またいろいろな人たちの話を聞いて、アビールの素案を書いて、全部の人たちにその素案を見てもらい、送り返してもらつて、訂正するところはして、最終草稿をまとめ上げました。

ブリュッセルのEUにも行きました。イラク担当の人に会つて、自分たちのミッションを相談して、EUとしてのアドバイスをもらいました。彼らは「いつ、どういう進展をするかは注目をしています。オフィシャルな、――というのは、あなた方一般市民の行動、あなたがやれる自由な行動の結果については、たいへん興味がある。ずっと見守りたい。EUがどういう関わり方をするかはいつさい約束はできないけれども、たいへん関心を持っています」と。これがEUの立場でした。

そして、ジュネーブで、初めてイラク側と接触しました。イラクの国連代表を訪ねまして、これから

イラク入りをすると言うど、彼は全面的に賛成してくれました。けれども、どういう目的で行くかということと、サダム大統領にあてる私たちのアピールは伏せてありました。それを言えば入国不可能だということがわかつている。では、これをいっどこで渡すのか。イラクに入ってから渡すのがいいのか、躊躇している矢先に、夜、テレビを見ますと、イラクのタリク・アジーズ副首相がローマ法王に会いにきているというニュースがありました。今ローマにいるということは、ジュネーブからすぐ先、チャンスです。すぐ平和運動の仲間に連絡を取りました。誰がタリク・アジーズをイタリアに招待したのかすぐわかりました。バチカンの一教会グループがタリク・アジーズを招待していました。翌日の朝早く、聖者の遺体が今も残っているその古い教会、聖フランシスコの聖地にタリク・アジーズ副首相がお参りをする行事があるので、夜行列車に乗れば、朝、間に合うという。すぐに飛び乗ってアッシジに向かいました。

ところが思いがけないハプニングがありました。夜行列車ですから眠ったのです。コンダクターが起こしてくれるものと思っていたから私は眠れたのですが、目が覚めてみたら、もう乗換駅を過してローマに行く途中です。車掌さんは、私がローマに行くものだと思っているから起こしてくださいと頼みました。切符には乗換駅が書いてあったのですが、「これはローマ行きか」と私が聞いたものですから、コンダクターが私はローマに行くのだと思って起こさなかったのです。

ローマに着いたらアジーズ副首相はアッシジに着いて、もうミサが始まっているので間に合わないという。それでも何かできるかもしれないと、さがるような気持ちで別の汽車に乗って、また一時間半乗り続けまして、アッシジに着きました。すぐにその教会に駆けつけたときには、もう全員中に入っていますし、電話で約束した神父さんは中で行事をやっていた。警戒が厳重で、大きな門が開いたときには、

そのままパトカーつきの大きな車が何台も出ていくだけなのです。もう取りつく島もない。機会を逃してしまいました。

残念なことをした、ここまで来たのにと、あきらめて、また汽車に乗って北イタリアに向かいました。それが二月十五日でした。二月十五日というのは、お釈迦様が仏になられた日です。夕暮れの中を汽車に乗っていると、西の山にきれいな夕日が見えました。きれいな夕日だと東を見ましたら、きれいな満月が東の空に昇っている。二月十五日は太陽歴でも満月だったのです。(1) 満月と太陽の間をこうして行く、しかもそれが二月十五日の仏様の日で、明日が私どもの開祖、日蓮上人の誕生日です。こんないい日にこんなにきれいな天体の動きがあつて、何かめでたいことがあるかもしれない、奇跡があるかもしれないと、心を変えまして、ローマまで行ってみようと、次の日、別の汽車に乗り込んで、ローマまで行ってみました。

(注1) イスラーム圏では今でも太陰暦を使っています。

ついに起こったヘローマの奇蹟

ローマに着いたらもう夜の十時。遅いのですが、タリク・アジーズさんを招待した牧師さんの自宅の電話番号を持っていますので、駅から電話をすると、牧師さんが出ました。「もう何もできません。私たちの仕事は終わりました。プログラムは全部オーバーです。もう私たちの手を離れたのだから、もう何もしてあげませんよ」と冷たいお返事なのですが、一言、「彼らはあしたの朝早く立ちます」と言ったのです。ということは、タリク・アジーズさんは今晚ローマのどこかにいるわけです。それで、駅のタクシーに、イラクの大使館にすぐに連れていってくれと、遠い郊外まで行きました。

着きました。大きな門があつて、鉄の扉がパシャッと閉まつていて、人っ子一人いない感じなのです。が、鉄の扉のボタンを押しましたら返答があつたのです。私はぜひタリク・アジーズさんに会いたくて来た。とても大切なことのために、イラクに行く前に、ぜひ会つて相談したいのだけれども、手を打つてくれないか、とインターフォンで話したら、ギリギリギリと大きな扉が開きました。それで中に入つて行きました。本当にお留守の人たちだけで、あとはがらんどつですが、「十二年前、湾岸戦争の時は私はイラクにいて、戦争がなくなるようにお祈りをしていたのだ。あなたも覚えているかね」と言つたら、「そんなことはあつたような氣もする」と、すぐ上役の人に携帯電話を入れてくれました。「こういうお坊さんが日本から来てイラクへ行きたいという。タリク・アジーズにぜひとも手渡したい大切なものがあるんだ」と相談しましたら、宿泊のホテルで待つてもらえばいいと。それでまた、すぐタクシーにホテルまで連れていってもらい、そのホテルで待つていたのです。

しかし十二時になつても連絡はありません。夜半の一時半ごろに、携帯電話で打ち合わせをしていた大使館の人が、やつと私のところに来てくれました。「もうこんな時間で、すぐに休まれるのだから、手渡すものがあるのだつたら私が持つていきますよ」という。「これは誰にも渡すことができないのです」と、直接タリク・アジーズさんだけに手渡すということを強調しましたら、すぐまた上にのぼつて行きて、タリク・アジーズのセクレタリーが降りてきました。「私が手渡すからいただきますよ。」「いや、あなたでもダメなのです。他人にいつさい見せてはいけないのです。直接でないとダメなのです」と。そうしたら「翌日朝早く来たら、発つ前に会わせてあげる」という。それで、翌日の朝早く行きました。タリク・アジーズさんと会いました。彼は十二年前の湾岸戦争のときのガルフ・ピース・チーム(2)のことを覚えておりました。それで、手渡すときに、「これは恐らくイラクの人たちは氣分を害する、心

外だと思われることが書いてあります。けれども、これは戦争が回避できる一つの確実な方法ではないかと信じて、世界中の宗教者の名前で大統領に訴えたものです。直々、誰にも渡さずに大統領にだけ渡してください」と、そういう約束をしたのです。タリク・アジーズさんは、「友人から聞く苦言は本当の言葉なのだ」というようなことをつぶやきました。友人の言葉であれば気にしなと言ってくれたのですが、本人は目の前では開きません。一週間後に私たちはバクダードに行くことを承知をしていただいて別れました。

それでも、とにかく渡せたのです。ついに奇跡が起きたのです。それで、いよいよイラク入りの準備をし、アンマンに行きました。

（注②）湾岸戦争の時、サウジとイラクの国境にテントを張って連合軍の侵入を命懸けで阻止しようとした国際的な平和活動チーム。

アンマンでは、ヨルダンの、プリンス・ハッサムという王子に会いました。

この方も宗教者で、いろいろと平和のことをやっています。けれども、このイラク危機に対しては、その立場はたいへん微妙でした。

あのころ「今後のイラク、中東和平のためには、サダム・フセイン政権をなくし、サダムにすぐ替えて、かつてイラクの王様だったヨルダンの王家が乗り出すとよい」という意見もあり、彼としてはとても動きにくい状況でした。

しかし本人が、「それを承知の上で言うが、自分はいっさいそういう野心がないし、レッド・カーペットに何の未練もない人間なんだ。これからの中東は本当に平和になるといい。もしも自分が一はだも二はだも脱げるということがあればやりたい」と、言ってくれました。

運命を狂わせたアンマンの大雪

いよいよイラク入りの準備をして、行くばかりになったときに、また大雪になりました。アンマンにも大雪が降るのです。雪が深くなると車が全然動かない。一分一秒を争う時に二日間足止めをくって、焦りが生まれました。その焦りが、致命的な間違いをしてしまいました。

バグダードに行くビザをもらうためにタリク・アジーズの事務所に、電話をしたのです。「約束どおりアンマンに来たからビザをください」と言うと、すぐイラク大使館に連絡をしてビザを出してくれました。ということは、彼は私たちがイラクに行くことを承知していたのです。サダムもあの手紙を読んだはずなのです。それでイラク入りを承知してビザも出したということは、大きなメッセージなのです。

けれども、その二日間の足止めの間に、私は大きな過ちをしました。イラク入りをするために準備したこと、アメリカとの関係、インドとの関係、EUとのつながり、それから具体的にどういう形でイラクの政権が平和裡に次期政権に移行するか、国連側の支援をどうするかなど、そういう背景を書いて、先に送っておけば、会ったときに話がしやすいと思ったので、ファクスで送ってしまったのです。時間がなく焦っていた。その焦りが生んだ失敗でした。よく考えてみれば、どこのリーダーの部屋も秘密情報機関がうようよして、互いに何をやっているか目を光らせている。そこに、その文書がバラツと行ってしまったわけです。送って、「しまったー」と思ったときには、もう遅かった。

バグダードに着いてすぐに、会う時間を決めましようと、タリク・アジーズのセクレタリーに電話をしました。本人は絶対に出ないのです。タリク・アジーズもいない。彼らは病気で家で寝ていて誰に

もう会いませんという。もちろん仮病です。私はファクスを送ったのは間違ったことと悟っていましたから、本当にもうこれで扉が閉まったのかと思ったのですが、一つ紹介してくれました。人間の盾を全部面倒を見る組織があります。〈Organization of Friendship、連帯と友情の国際組織〉というところ。そこに、イラクに集まってくる反戦の人も聖戦の人も、ジハードの信仰者も、またバアス党のように、国際連帯のイデオロギーをかき立てて、サダムこそ反米、アメリカの帝国主義の野望をくじくりだすという人たちまで、いろいろな思想、背景、使命の人たちがバグダードに集結して、一点、アメリカの武力攻撃を阻止すると言っている、そのいろいろな流れの人を全部一手に引き受けてやっているのがこの組織なのです。そのドクター・ハシムとすべてやりなさいということだけで、あとは、タリク・アジーズとも、事務所とも、交渉の扉はいつさい閉められました。

その夜遅く、ドクター・ハシムという、その組織の責任者の方が、会いにきました。これからどういう行動をしていくかといったこちらの計画をいろいろ話しました。例えば国連の前でこれからすぐ断食をしたい。いろいろなイラク側の宗教者と話し合って、共同の平和のためのプログラムをつくりたい。できたら平和交渉にしたい。反戦のために集まってくれた団体や個人の人たちとも交流していきたいという話です。ざっくりばらんに終わつたのですが、ドクター・ハシムは承知しないのです。「それだけでしたか。あなたの本心を言ってもらわなくては困る」と。もう向こうはわかっていて言いました。もう言わなくてはいいけないと、「私たちの本当のミッションは、戦争を回避すること。そのただ一つの鍵は、自主的に退陣をし、イラクの主権を保持し、領土の連帯性を保持した上で、自主的に政権を移行するという方法。そういう自主的な退陣の道筋をつけたい。それを宗教者としてアピールし、それが実現できるものならそういう枠組みをつくっていくお手伝いの役に立ちたい。そのために来たのです」と。ところ

が言つたとたんに彼の顔が真っ赤になった。「何を言っているんだ、そんなバカな話があるものか。われわれは、もう国際社会が要求することは全部のんだじゃないか。これ以上何がやれるのか。全部やつたじゃないか。その上に何ができるのか」「そういう話はイラクの人たちに一言もするな。ここで終われ」と、もう力ツカと、まさに爆発するような怒り方です。

しかしそれは、私に向かつて言っているのではない。彼を観察していますと、彼のそばにいる第三者のイラク人に行っているのです。もう、いっさい、合意の一かけらも見せてはいけません。そうしないと、彼自身の首が飛ぶ。しかし彼は、すぐに帰れとも言わない。私たちの目的は知っているのに、「あなた方が泊まる宿は準備する、食べるものも出す。いてもいいのです」と。そこに二重のメッセージがある。彼は、私たちがまだ、あるいは役立つかもしれないから置いたのです。その時点では問題外だと言いがら、ひよつとしたらまだ使えるから置いてもらえたということです。

そこで私たちはそのあと、国連事務所の前でしばらく断食をしました。フランスがいよいよ拒否権を行使する、安全保障理事会では武力行使の決議案が通らない、という状況になった時点ですね。そして一週間、平和行進をしました。もうそういう流れのときですけれども、それも許してくれました。

平和行進の前にバクダードで記者会見をしました。三月十七日に安全保障理事会の武力行使の決議を通すというのがブッシュのその時の立場だったので、その十七日に、平和行進はバクダードに到着することになりました。

チグリス川という大きな川がありまして、情報省という世界のジャーナリストが集まっている大きな建物の対岸に、大きな橋がかかっている。その橋に人間の鎖をつくって、ろうそくの火をその橋の上に掲げ、光の橋にして、日が暮れてから灯篭流しをして奇跡を祈ろうと、バクダードの平和の最後の日、

十七日を決行の日に決め、街角でも公園でも学校の中でも、教会の中でも、ホテルの中でも、みんなろうそくをともし、奇跡が起きるように祈ってくださいというアピールを世界中の人たちにも、バクダードから出したのです。そのアピールは、アメリカのクエーカーが、即、受け止めて、全米に広めてくれました。それをそのまま南アフリカのデスモンド・ツツ大司教が世界中に呼びかけてくれました。

十七日の夕方また満月でした。西に日が沈み、東に満月が上がるその時に、みんなでろうそくの火をともし、奇跡が起きることを祈るというアピールを実行したあと、灯籠を川に浮かべました。

逃げずに花を飾ったバクダードの市民

その、ぎりぎりのころのバクダードの人たちの様子ですけれども、誰一人逃げる人はいないのです。あと二日で攻撃が始まる。そのときが来ているのに、誰一人として逃げる人がいない。日が暮れてから、川のそばのレストランやお茶屋で、若い人たちは中東のマージャンのような遊びをやっていました。これから戦争が始まるというのに、みんなやっているのです。爆弾が起きれば全部めちゃくちゃになるのがわかっているのに、レストランも、どのお店も、きれいにお花で飾ったり、ますますきれいにしていくのです。なぜか。あしたから戦争になる。残る最後の一日の平和を最高に楽しもうという生き方なのでしょうか。イラクの普通の人たちはそういう生きさまでしたね。

十七日の前一週間、平和行進でバクダードの郊外を歩いたのですが、防衛の施設は、一つも見ませんでした。大砲もない。対空砲射もない。タンクもない。軍隊の基地も全く見えない。戦車もない。バクダードの郊外ずっと、全くの無防備です。ブッシュ大統領が四十八時間という期限を切って突きつけた

戦争だから国外に逃げるかという時点になって、初めて十代後半から二十代の召集された兵隊たちが、五〇人、一〇〇人と一日中ひっきりなしにトラックやバスで、バクダードに集結し始めました。彼らの顔を見ますと、悲惨でもなければ、憂鬱でもない。もちろん聖戦に行くという勇ましさもないのです。普通の明るい顔をしている。私たちが手と手をとって歩いているのを見ると、みんなトラックから手を振りながら行く。トラックから降りて私たちと一緒に平和の鎖をしたりする兵隊さんもいる……。

平和行進で歩いていると近くに学校があります。学校から子どもたちがみんな、何百人も勉強をほっぽり出して出てくるのです。そして、みんなで平和のために鎖をつくりましょうといったって、学校の先生も一緒に手をつなぐ。そういうふうには何の恐怖もなかったのです。

バキスタンでも経験しましたけれども、外国の人間だからということでは憎悪もなければ、異教徒だということでは嫌う感覚も全然ない。本当にあけっぱるげに私たちを迎えてくれる。そして、今、このいつときの平和を十分に味わうんだという、それが彼らの生き方、生きざまでした。

ブツシュが四十八時間と時間を切って宣言を出したあと、私は、ハシムに、「何とかやらせてくれ」と、もう一度言った。「われわれにもう一度やらせてくれ」と。「カンタベリーやゴルバチョフや、あるいはマンデラが来てくれるかもしれないのだ。フセイン王子が直接電話で呼びかけて、バクダード入りを準備してくれているんだ。迎え出てくれるか」と言ったのです。するとハシムは大声で罵倒しました。バクダード・ホテルのロビーのジャーナリストがみんないる前で、罵倒した。「いつさいやらない。ゴルバチョフが来たら、顔につばを吐きつけてやる。彼は社会主義を裏切った売国奴なんだ」と。「プリンス・ハッサムなんて、彼の下心は分かっている。彼らがやることはいつさい受けつけない」と。みんなの前で怒鳴り散らしました。

そこで私は平和行進を準備してくれたイラクの友人に、ヒンズー語で内緒で話しました。英語だとみんなに聞こえるので、「あと十二時間待つから、こういう連中ではない、上のトップ三人とパイプをつないでくれないか。あと十二時間が勝負なんだ。この十二時間に、退陣・亡命が最後のぎりぎりに追い詰められたオプシオンとして可能性がある。その十二時間を私は待つ」と。彼も「本当にそうだ。もう生きるか死ぬかなんだ。やってみる」「中間の人を全部パイパスして、トップにだけパイプをつけよう」と。それで今か今かと、十二時間だけ待ったのです。

私は、お弟子が三人おり、みんなまだ二十代の好青年で、彼らの両親から彼らの命を預かっていましたから、バクダードの戦闘中、私はこのお弟子たちをバクダードにとどめる気はない。バクダードの戦争はどういう展開になるかわかりませんし、ただとどまることだけが目的ではないので、彼らに、「万が一、十二時間待つてダメなときにはすぐに出よう」と、車の手配は準備させたのですが、どこをあたってみても一、五〇〇ドルとか、二、〇〇〇ドルというべらぼうな値段なのです。とても私たちはそんなお金は払えない。ということとは、結局帰らないで残ることになると覚悟しました。

そこへ例の相談をした人が十八日の十二時半になって戻ってきました。結局ダメだったのです。もう無理だと。「イラク側は絶対、政府の方針は変えないのだ。もう無理だ。待つても無駄だ」と言われて、とどまってサダム・フセインを見捨てるようなことはしたくないし、アメリカ軍がバクダードに入ってきたときに、アメリカ軍を迎える気もないし、私はここできれいさっぱり自分たちの使命がこれで終わったのだと、すぐに出ようと思ったのですが、お金がない。そうしたら、そのイラクの友人が「私の親戚に頼むから、それで行ったらいいいよ」と、二〇〇ドルで大きな車を手配してくれ、二時ごろにバクダードを後にしました。

アンマンに着いた六時間後に第一期の攻撃が始まりました。四月八日、バクダードに再びもどつてくるまで、アンマンにとどまって眺めていたのですが、CNNやBBCが二十四時間で流すイラクの戦争と、アルジャジーラが流すテレビの報道とが全く違うのです。インフォメーション・テクノロジがこれだけ発達したのに、二十一世紀になつて、メディアと宗教によつて世界はこれまで以上に大きく分断されてしまつた。世界の見方が全く違うようになった。宗教と、その宗教を利用するメディアのテクノロジによつて、世界の見方が全く違うブロックがどんどんできています。もうこれはイデオロギーではない。生き方の根本が違うわけです。それによつて本当に軍部の衝突というのがこれからあり得る。それを乗り越えるにはどうしたらいいか。それが今後の大きな課題ではないかと改めて考えこみました。

「質疑応答」

A 先ほど「市民運動の側で考えて第三の選択肢を提示するという機能がもうひとつ弱い」と指摘されたわけですが、けれども、私がやっているチエチエンの平和運動も含めて、日本の平和運動というのは、何をしたらよいかと提案をする力が弱いなという感じがしています。寺沢さんは、日本の今の様子や今後のあり方についてどういうふうに感じられますか。私たち、日本でいろいろな平和運動をしている人間にとっては厳しい話になるかもしれないのですが、話してください。

あらゆる立場、あらゆるオプシオン、シナリオは、直面する多様な危機に対して、いま本当に問題が山積みです。日本国内の問題にしましても、北朝鮮の問題にしても、これからの中東の問題にしても、またアフガニスタンの問題にしても、あらゆる問題が山積みですが、いろいろな立場でいろいろなシナリオでいろいろな見方があつていいと思います。「これだけでないとダメだ」というのだけをやめればい

と思うのです。そうでないと、イデオロギーの空論になる。こつちが正しいのだということを証明するための議論であつては空論だと思う。前に進まないわけです。いろいろな見方があつて、いろいろな立場があつて、いろいろなシナリオ、オプションがあつていいと思うのです。

問題は、それを全部出し合いながら、現実的に緊急の問題、中期の問題、長期の問題、局地の問題、国内の問題、地域の問題、地球レベルの問題、国連の問題、さらにこれからの地球統治、グローバルガバナンス全体の問題……と、段階がいろいろあり、見るレベルもいろいろあるわけです。その中で、これだけが正義だとか、自分が正義なんだということを証明することだけの議論であれば、今は役に立たないということです。

ところが、あまりにもそういう議論が多いと思うのです。イラクの問題でもそうですし、国連での安全保障理事会での議論でもそうです。こつちだけが絶対ダメなんだ、われわれが絶対なんだ、われわれの正義ではないものは全部悪なんだという、それがブッシュにある。平和運動の側にもある。ビンラーディンにもある。パキスタンにも、インドにもある。北朝鮮にもある。それぞれ言っているのは全部、こちらが善で、こちらが正義。そうでないものは悪だという、それだけの議論です。

そうではない議論をどうしてできるか。日本の場合にはどうあるべきか。やはり、原点は日本の戦争体験だと思います。一〇〇年前に日本が列強の侵略の危機に遭い、尊皇攘夷の国内論争の中で明治政府が確立された。その明治政府は、日本の近代化は富国強兵、西側ヨーロッパに追いつけ追い越せ、それには武力を持つ以外にはないと言いつけた。そして、そういう「頼もしい日本」を、イギリスやほかのヨーロッパ列強が利用したわけです。利用して、アジアにおける侵略、帝国支配、植民地支配のカードに日本を使った。日本は駒として使われて、日清戦争をする。日露戦争をする。そしていい気になる。そ

うしたら、今度は中国大陆で列強との利害が完全に衝突するようになった。そして日本は外交で失敗し、軍事の独裁に走っていく。そうなると、国内ではファッショが出てくる。国家神道という宗教が出てくる。それは、今のイスラムのジハードの思想と全く同じなのです。反現代、反西洋、さらにいけばヨーロッパ全土は悪魔だという、彼らを撲滅することがアジアの未来を開くという、そういう思想的なお先棒を日本はかついで太平洋戦争まで行き、広島・長崎まで行くわけです。

こういう複雑な問題をこんな短い時間で話すことがそもそもおがましいことですけれども、そういう近代化の中のたいへんな悲劇の歴史、そういう負の教訓というものを本当にかみしめたときに、何かが生まれる。今、パキスタンやイラク、オサマ・ビンラーディンの思想は、日本がかつてやったのと同じことをくり返しやっている。そこに、われわれの恐ろしい体験から来るひとつの忠告があつていいと思う。そういう忠告が活かされていないのです。

もう一つは、広島がやはり原点だと思うのですが、現実として人類は共に滅びる。地球は共滅する。共滅から逃れるのは共生しかない。すべてが一緒に生きるか、一緒に滅びるか。そういう意識を人類が初めて持ったのは広島悲劇、核兵器が原因です。地球に生きるあらゆる生きものが、共に生きるか死ぬかなんだという意識を、われわれ市民が今、改めて持つ必要がある。そこに日本国憲法の本当の人類史的な意味があると思うのです。そういう背景を抜きにして、日本の国内の中での平和憲法が善であつて、それに反対しようとする人たちは悪なんだという単純化をしてはいけないと思うのです。広島・長崎のあとに生まれた日本国憲法というのはどういう意味があるのか前向きに考える。日本国憲法は、日本の一人ひとりの人間の生命、生きる権利を主権国家の上においた。まさにコペルニクス的な変化が一

つの国で起きたのです。それまでは、絵に描いた餅のように、そういう理想はあったけれども、主権国家が戦争権を否定し、武力は保持しないと初めて宣言した。このままで行けば地球も人類も滅びると、近代国家が初めて国の主権よりも一人ひとりの人間の平和生存権を上において、国家といえどもその権利を奪うことはできないと宣言した。コペルニクスのな転換です。それが日本国憲法です。その精神を、国際社会のこれからのグローバルガバナンスの本当の普遍律として樹立するところまで市民が動く。そこにただ一つの打開策がある。そこには、まさに宗教の違いも顔の違いも言葉の違いもない。どんな違った人も、保守も革新も、ジハードも無神論者も、全部共に生きなければいけない。でなければ、共に滅びるわけです。そういう意識を今こそ市民一人ひとりが持ち、そして、国家というものの上にそれを点火させていく。それさえ踏まえていけば、新しい道が開けるのではないかと思います。

B イラクの首脳部が外圧によって変わるのではなくて、自主的に政権を交代するというミッションを持って行かれたということですが、イラク国内には、そういう政権交代できるような勢力というのは存在したのでしょうか。大統領がそう決定したとしても、その政権を担える受け皿、人材がいなければできないですよ。そういう勢力がもし、イラク国内にあったのだとすると、アメリカがそういう勢力を援助してクーデターを起こすこともできたのではないかという気がするのですが、どうしてそうはならなかったのでしょうか。

私と激論をしたハシムさんは、「それをすれば内乱は必須だ。サダム・フセインの政権があるから、もっているのだ。今、この主導陣が退陣すれば内乱は必須だ」と言いました。それが一番大きな答えでした。

C 寺沢上人がイラク政府に出したピース・プランの中では、フセイン自身が自主的に辞任したあとは、国連が中

間的な暫定政権を運営すべきではないかという提案をなさったのではないのですか。

私の案は、「サダム・フセインが辞任の意向を公表すると同時に、国連安全保障理事会がイラクの政權移行を平和裡にできるための平和維持軍をイラクに送るという決議をする。そして、サダム・フセインは退陣の意向を表明すると同時に、次期暫定政權もイラクが自主的につくる。それを一日のうちに同時にやるという、クロス決議をしてもらいたい」という案です。そのためには、アナン事務総長とEUの理事長国であるイタリアの首相、それからカンタベリー大僧正やネルソン・マンデラなど、そういった著名な人たちにバックタードに来てもらいたかったのです。そういう一つの具体的なプログラムはつくってあったのです。

D これから日本の社会が関わる大問題として、朝鮮の問題があります。今の時点でどんなふうにお考えですか。私は勉強不足で、極東をほとんど歩いておりませんので何も言えません。これから明日、韓国に出発します。一応、北朝鮮の国境のすぐ近くに、うちのお坊さんと関係がある韓国の仏教の人たちが平和のための仏舍利塔を建てている。山一つ越えたと北朝鮮。そこに敷地がある。まだ建物は全然建っていないのですが、その敷地まで行きましたならば、三日間断食をしてお祈りして、これからの動きについて、自分が何ができるかまとめていくつもりです。現実には、極東が直面している問題は戦後最大の危機だと思っています。日本外交が根本的に問われる。そういう意味では、本当の論議、前向きな論議につき合う必要があるわけです。

尊皇攘夷の明治時代に勝るとも劣らない、心が真つ二つに分かれる論議があつていいと思います。そ

ここで、日本国憲法の本当の真価が問われる。五十年間、日本の国は日本国憲法を信じていなかったのだ、口だけで終わっていたんだ、というところに落ちていくのではないかと思います。私はそちらのほうが強いと思います。九九%、日本国憲法の本当の精神がここで葬られるのではないかと。

誰が葬るのですか。保守政権ではないのです。日本の国民全体で葬っているのです。この五十年間、日本の近代化はここまで来た。あれだけの人を喪い、アジアの国ぐにを侵した罪と、その上に立つた歴史的な教訓が、五十年間何一つ腹の底にまで落ちなかったし、それが自分たちのバックボーンになり得なかった。その弱さが今まさに出ていると思うのです。

今、本当に北朝鮮の核の危機が現実となっているわけですが、ここで少し武力を持つて、武力的に対抗できるのか。そういう選択肢を取ればこの危機が解除できるのか。あるいは、本当に核攻撃が来ても、日本が核の攻撃の戦場になっても、日本は戦争はしないのだという、そこまでの覚悟で日本国憲法の道を進む人がいるのか、いないのか。そういう根本の外交を国際社会に示せるのか。第三国に守ってもらっているから日本国憲法はあってもいいということなのか。

もしもアメリカの挑発で本当に北朝鮮の軍事に火が噴き、核ミサイルが装てんされたときに、日本はただそれを黙って受けるという覚悟で、引き受けられるか。

もしそれができれば、核分裂競争という連鎖が、ついにそこで断ち切れる。そのオプションを日本は日本国憲法で持つのだということを国際社会に言えますか。言う人がいますか。言えなければ骨抜きなだけだと思います。

E 寺沢さんは自分の意見を主張するだけでなく、相手の意見を取り入れることが必要であると言われたのですが、

物事の意思決定の場合には、必ずどちらかを決定しなければいけない。どちらかを取ったら、どちらかを排除する可能性がある。それを防ぐのは、自分と違う方向性をとらえたとしても受け入れることができるようなシステム、メカニズムをつくっていくことが必要だと思うのです。その場合に何が一番重要になってくるのでしょうか。例えば、教育でそういうシステムが、いろいろあると思うのですが、寺沢さん自身が一番重要だと思うことは何ですか。国際的な枠づくりやシステムは、もう完全に破綻しているわけです。それは手直しすれば直るのではなくて、一人ひとりの世界観です。世界をどう見るかという世界観が、今本当に分断されている。先ほど言いましたけれども、メディアと宗教によつて先導されているわけです。それを乗り越える鍵は一緒に生き延びるか一緒に滅びるかという、そういう意識にみんなが目覚めなくてはいけないと思うのです。今われわれが生きている世界が、このまま全部が一緒に生きるためには、本当に根本的な、新しい意識の目覚めが必要なのです。もしそこで、旧来のようなやり方でいけば滅亡です。

E その意識改革のためには何をすればいいのですか。

それは、あと五時間ほど仏教のお話をしないと……。 (笑い声)

司会(大宮 由) 貴重なお話をありがとうございます。時間切れになったのが残念です。今度日本にお戻りになったときに、また、ぜひお話を伺いましょう。

(二〇〇三年七月三十一日 文京区民センターで) (写真・林 克明／速記・鈴木祥子／まとめ・佐藤和代)

「イスラエル潜入記」 I

私が見た〈カベ〉 1

恐怖の入国審査

「なんでパスポートにイランのビザがあるのか！」入国審査官の女性が血相を変えて叫び始めた。

イスラエル入国は、知る人ぞ知る「恐怖体験」。エジプトとの国境ターバーから陸路で入国すれば「エルサレムの空港からの入国ほどの恐ろしさはない」という話だったが、ターバーから入ったのに「恐怖」に変わりはなかった。リュックも荷物もすべてばらし、カメラなどには爆発物が入ってないか一つ一つ調べるといふ、聞きしにまさる徹底ぶり。入国審査官はソフトなイメージを演出する為か若い女性が多いのだが、実はこれが甘い罠。さんざん喚き立てたあげく上官を呼び、「イランのビザがあり、旅行目的もあいまいで実に怪しい」と盛んにまくし立てる。女の勘は恐ろしい。そこへヌツと姿を現した上官は、ア―



アラブの戦士は僕らのあこがれ？！

永井徹男

ミテージ米国務副長官に瓜二つの巨魁。睨みつけられた時はさすがに観念した。

話してみるとアーミテージ氏は、顔に似合わずなかなか温厚なお方だったが、しかし彼も、こちらの話もそこそこに、怪しい人間かどうか電話で問い合わせ始めた。待つこと二〇分。どうやらシロとの判定で漸く入国が許された。審査開始から一時間半。冷汗やら脂汗やらで瘦せること請け合いの入国審査だ。

さて、入国審査が終わると、そこはもうイスラエル側のエイラット。紅海のマリンプルーが目眩しい。平和そのもののリゾート地だ。エイラットで泳いでいるかぎりはこの国が半世紀も戦争状態にあるとは、とても信じられない。

エイラットからエルサレムへ

エイラットからエルサレムまでは砂漠と岩山をバスで五時間の旅。だがバスに乗ると、一〇人ほどの客のうち三人が軍服姿の若者だ。二人は女性兵士で手ぶらだが、男の兵士は裸の機関銃を提げてバスに乗り込んでくる。この国には軍役があり、適齢の若者は一定の期間、軍務に就かなくてはならない。これは外国に住む



エルサレム近郊に住むパレスチナ人の住居。柱とトタン屋根だけで壁も戸もない。

ユダヤ人も同じで、大勢のユダヤ人の若者が軍役に就くために世界中からイスラエルに集結するのである。またイスラエルが世界中のユダヤ人に対して志願兵の募集をかけることもしばしばだ。

ユダヤ人には、「アラブ人は生まれながらのテロリストで、話し合いなどできるはずがない」と、本気で信じている人も多い。はたち前後の若者がアラブ人に対する恐怖心を軍隊教育で叩き込まれ、体験を通じて植え付けられていけば、このような偏見と被害妄想も定着してしまうのかもしれない、などと考えにふけっていると、右側に広大な海が見えてきた。

紅海はエイラットの周りだけのはずだが……と思って見ると対岸にぼんやりと山並みが霞んでいる。……死海だ！　こりやどう見ても海だ。湖とは思えない、と思われること間違いないのスケールだ。

屋根と柱だけのパレスチナ人の家

バスはこのあと死海に沿って二時間以上も走り続けた。

死海が見えなくなつて約一時間、いよいよエルサレムに近づいて来ると、乳白色の岩の丘の斜面を縫うように走り始める。

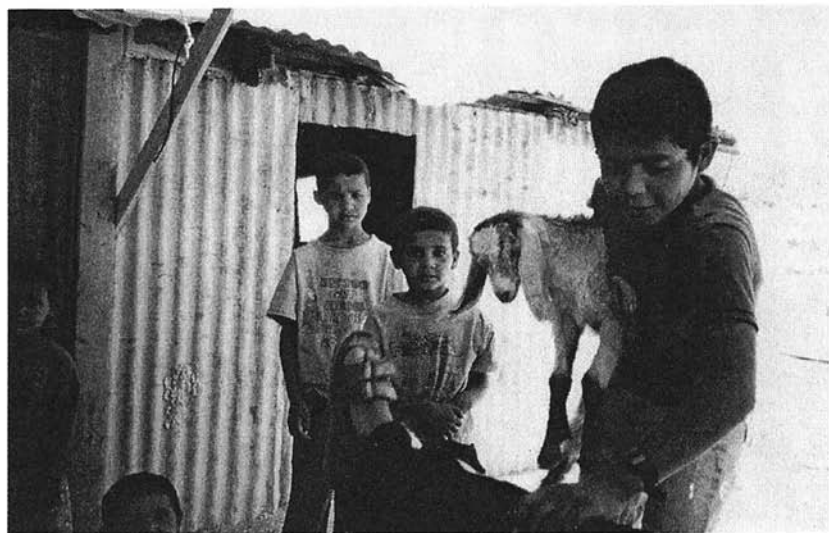


現在も盛んに建設が続けられているユダヤ人入植地。

斜面の所どころに山羊の群れと黒いビニールシートのようなものが杭に縛つてあるのが見える。何かと見てみると、その下から粗末なボロを纏つた子どもが這い出して来るではないか。どうもこのシート、照り付ける直射日光を避けるためのアラブ人たちの工夫のようだ。それにしてもあまりに貧しい。

一方丘の上を見ると、一様にオレンジ色の屋根で全く同じ造りの西洋風の立派な家何十となく並んでいる。ユダヤ人入植地だ。斜面に暮らすパレスチナ人との圧倒的な貧富の差。

それでも比較的安く暮らして行ける入植地に入るのは、ユダヤ人の中でも外国から移住して来たばかりの人や物価の高い都市に住めない人が多いという。パレスチナ人の住む地域のただ中にわざと造られる入植地は、いわば紛争の最前線でもある。だから海外からの移民など、経済的、政治的に最も弱い立場のユダヤ人が入植地へと送り込まれる。襲撃される危険も高く、軍による入り口や周囲の監視も嚴重だ。後にエルサレム近くのマアレ・アドミンというユダヤ人入植地に行ったが、公園や花壇や並木まで整備され、禿げた岩山の上に突然欧米の高級住宅地が降つて沸いたような風情だった。



山羊は、子どもたちの家族のひとり

貧しいけれども温かなパレスチナ人

同じ禿山でも斜面など使いものにならない土地にへばり付いているのが、パレスチナ人のボロ小屋だ。

マアレ・アドミン入植地近くには海外のNGOが建てたパレスチナ女性のための学校があり、学校の周りの家に近寄ると、七、八人の子供たちにあつという間に取り囲まれ、小屋へと連れて行かれた。木造小屋の中には家族分のマットレスのほか家具らしきものも無い。恐らく食料援助に頼る暮らしだろうが、それでも私にお茶を振舞ってくれた。見るからに何も無い暮らしだが、山羊を飼っている。山羊がいれば、その乳からヨーグルトやチーズが作れて、何とか生き延びられるのだろう。

礼拝を禁止されるエルサレムのイスラム教徒

エルサレムに着いた翌日はイスラムの休日、金曜日だった。金曜の朝になると、エルサレムの旧市街に入る門にイスラエル警察がしばしば検問を敷く。アルアクサー寺院でパレスチナ人が祈れないようにするためだ。



金曜の朝に旧市街の出入りを調べるイスラエル警察

イスラム教徒のパレスチナ人に、「望みは何か？」と聞くと、
「アルアクサー寺院で祈ること」と答える人も多かった。それ
ほどイスラム教徒にとってはつらい仕打ちなのだろう。

「アルアクサーで礼拝させるとパレスチナ人が騒ぎ出す」とい
うのが礼拝禁止の理由だが、これほど反感を買うことをすれ
ば、かえって攻撃に走ることになりそうなものだ。イスラエル
は治安のため安全のためと称してパレスチナ人を締め付ける
が、そうやって抑圧するからこそ反発するとは考えられないの
か、それとも本当は、挑発が真の狙いなのか？。このように二
ワトリと卵の話みたいに堂々巡りになるような理由ばかりイス
ラエルは持ち出してくるようにも思える。

エルサレムの安ホテルに逗留している際に、ホテルに帰れな
い晩があった。なにしろパレスチナ自治区に入ると、町によつ
てはエルサレムに戻る最終のバスが朝の一本だけとか昼頃まで
という所も少なくない。タクシーを借り切らなければエルサレ
ムにその日のうちには帰って来れなくなるのだ。翌日ホテルに
戻るとホテルの管理人が血相を変えて怒り出した。金は払って
あるのに何が問題なのか？と尋ねると、「我われは毎日警察に宿
泊者リストをファックスする義務があるのだ」と言う。「泊まっ



エルサレム市中でアラブ・バスを検問するイスラエル軍。

たことにすればよいではないか?」「無論そうするしかないが、ブツブツブツ……」。

管理人も警察に睨まれないように必死の様子。そういえば「恐怖の入国審査」の際にも、あるホテルの名を出したら女係官が激昂し始めた覚えがある。きつと当局に睨まれているホテルの名前を知らずに口にしていたのだらう、と合点がいった。

検問——その恐怖とカラクリ

エルサレムを後にし、今回の目的である「壁」を取材すべくカルキリヤへと向かうことにした。

バスでカルキリヤに向かう途中、道の両側にはしばしばオリブ畑が広がる。オリブの根元は小石を積んで段々畑状になっている。これだけの小石を積む作業は大変な労力のはずだ。先祖の代から繰り返し繰り返し積んで来たに違いない。農民たちにとって努力の結晶であるこのような畑への愛着もひとしおだろう。

しかし壁の建設に伴い、壁の建設ルート周辺の広大な農地がブルドーザーの下敷きになり、使いものにならなくなった。こ



検問所に屋根をかける兵士と、調べられるアラブ女性。

れでは農民の怒りに火を点け反イスラエル感情は増すばかりだ、などと考える一方、ガレ場の荒地のため乾燥に強いオリブくらいしか育たないのだろうか（この印象は、あとで完全にくつがえされることになるが……）と思いながらその光景を見ているうちにバスが止まった。

検問らしい。イスラエルの兵士がバスに近寄り何か叫んだ。すると男たちは手に身分証を持ち、そろそろとバスを降り始めた。そこで私も後について降りた。

パレスチナ人四、五人をチェックする間、兵士が高圧的で興奮しているので私も緊張していたが、私の番になると行き先や目的を尋ねただけで、冗談を言ったり笑い出したりしてふざけ始めた。何といっても兵士もまだ子供なのだ……と思いつつ、ホッとしてバスに戻る。

一人ひとり、みんな親切

バスが再び走り始めると、一人のパレスチナ人が話しかけて来た。

「いや助かったよ、あんたのおかげだ。」



幹線道路の検問で車を止めるイスラエル兵士

「????」

「我われを検査している時は陰悪なムードで兵隊がヒステリーを起こしかけてたんだ。しかし外国人のあんたが居たので、それ以上、我われを手ひどく扱うわけにかなかったのさ。外国人にはパレスチナ人を丁寧扱つてると見せるように教育されているだろう。」

「!!!!」

道理で、日本はすごい、などと兵士がリップサービスして来たわけだ。

このあたりの駆け引きも外国人が旅行で訪れただけではなかなかわかりづらいところかも知れない。

実際旅先のイスラエル側の町で会うイスラエル市民は、実に親切なことが多い。その印象をそのまま紛争の場に当てはめると、こんな親切なユダヤ人たちがパレスチナ人がむやみに爆弾テロで殺している、ということになるのも無理もない。

これはイスラエル市民にしても同じで、「なぜパレスチナ人が爆弾を抱えて向かって来るのか全く理解できない」と言う人が多い。そもそも占領地で政府や軍によって行われていることについて、関心が無いイスラエル人が多い。



バスから降ろされ身分証を調べられるパレスチナ乗客

「だって、あたしや、ユダヤ人の団体に言われるままにロシアから移民してきたばかりでね。難しいことはわからないんだよ」と言うおばあちゃん。

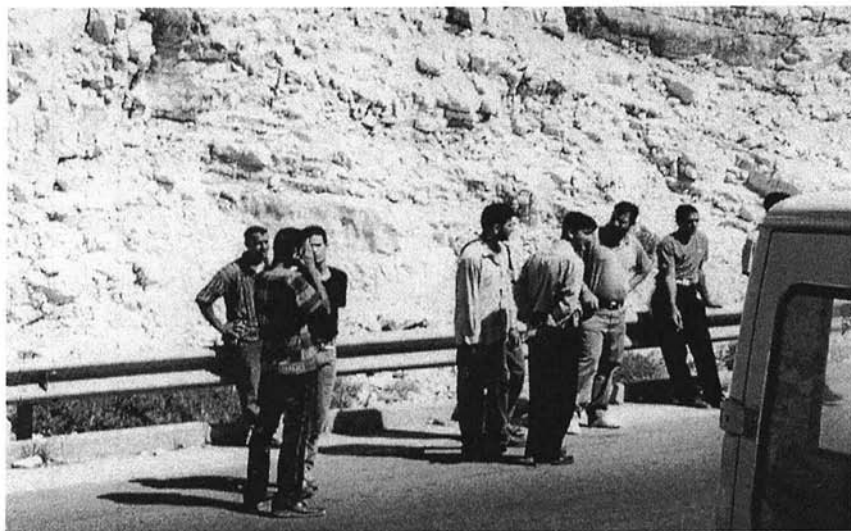
「アルゼンチンの経済が崩壊したので僕たち一部のユダヤ人は米国で再教育を受けてからここに送り込まれたんだ」と言う、アルゼンチンから昨年来たばかりの若者。

理解不能のまま自爆攻撃などに対する恐怖心ばかりが増幅するため、「パレスチナ人は生来のテロリストだから治安対策では強行策しかない」という現政権の宣伝を支持してしまうのかも知れない。

そうこうしているうちにカルキリヤの入り口の手前でバスが止まり、運転手の声が聞こえてきた。

「ここから検問までは歩きだよ。検問を越えたらタクシーを拾いな！」
(以下次号へ)

(ながいてつお〓中南米・西アジアで取材を続けているフリージャーナリスト。イスラエル・パレスチナ入りは、〇三年が初めて。)



炎天下の道路で身元調査を待つパレスチナ人。

キリスト教会のセクハラ・人権侵害裁判に関わつて

澤田和子

セクハラという言葉はもう日常語の一つになった。それだけ根が深く幅も広いことだろう。最近、セクハラ裁判も、訴えればほとんどが勝訴する時代になったが、勝訴しても、被害者の心身の傷は、いやされるだろうか。私が支援を続けているセクハラ事件の裁判について感じたことを述べ、読者の意見・異見を仰ぎたい。

〔事件の概要〕

キリスト教に惹かれて大学でキリスト教を選び、将来の指導者を目指して一九九八年三月、日本基督教団熊本白川教会（以下、白川教会）の職員となったA子（原告・二十代）は、就職後、牧師B（被告・五十代）の指導

を受けることになったが、Bから連日、執拗なセクシュアル・ハラスメントを受け、二〇〇一年三月、ついに退職、同年四月、Bを相手どり、一、一〇〇万円の損害賠償請求訴訟を神戸地裁尼崎支部に提訴した。現在、訴訟は最終弁論を終わり、判決を待つばかりとなっている。

この間、A子を支援する（熊本白川教会のセクハラ・人権侵害を糾す会（事務局・熊本県））も出来、判決は勝訴することが期待されているが、この裁判を通じ、同教会は、一貫して被告を弁護し、教団も被告の言動を黙認した結果、原告も、その家族も、さらに心身の傷を深くした。その詳細は下記のとおりである。

BはA子の就職直後からA子に対し、事務室ばかりか、

礼拝堂などでまで、二人きりになると体のあちこちに触れ、「妻とは愛のない結婚をした。若い女性を長い間抱いていない」と語り、原告のアパートに夜な夜な電話して、卑猥な話を続けた。二〇〇〇年夏に退職の意思を示すと、「辞めるのなら後任の女性の写真を見せよ。自分が抱きたいと思う女しか雇わない」とまで明言した。

Bは、これらの言動が教会内で漏れることを恐れ、A子に対し、「教会の人と交わるな」「意見は言うな」「奴隷になればよい」などと命令し続け、「牧師を疑うのは信仰が足りないからだ」と思うように仕向ける一方、人前で怒鳴りつけて恐怖心を植えつけ、抵抗ができないようにした。

A子のほか七人の女性も同様の被害を受けていたことが、裁判で明らかにされた。A子は、キリスト教教育主事(DCE)になるのが夢。推薦状は牧師が書く。Bに積極的に立ち向かったA子はDCE資格試験の日程を伝えてもらえず、受験の機会を奪われた。

このような状況のなかで、A子は、悪夢、不眠、食欲不振、倦怠感、微熱などPTSD(心的外傷後ストレス障害)で苦しみ、転職先も一年後に失業した。今年四月、

法廷で証言した医師は、「完全に回復するにはあと二年はかかるだろう」と証言している。

〔Bと教会側の反発に憤るA子側〕

一方、訴えられたBは、「自分に反感を持つ白川教会の伝道師がA子をそそのかしたでっちあげだ」と反論。また、〇一年二月、A子の訴えを受けた白川教会幹事会は、「Bのセクハラはなかった」と断定して訴えを退けたばかりでなく、「伝道師によるでっちあげ」とBを擁護した。

一方、白川教会の所属する日本基督教団の地方組織「九州教区」は、調査小委員会を設けて調査した結果、事実を認定し、Bに辞任勧告するとともに「牧師辞任に向け適切な措置をとるよう」白川教会に要請したが、Bと教会は、「調査は不当」と反発した。Bは二〇年以上も白川教会に在籍している。

九州教区はBに対する処分(教団では「戒規適用」という)をも教団本部の教師委員会に申請した。これを受けて教師委員会の委員長と書記はA子の実父から〇一年

一〇月、事実経過と原告の被害実態を一時間四〇分にわたり聴取、父親は医師の診断メモも手渡したが、委員会は翌十一月に、「処分見送り」を決定した。理由は「裁判係争中であり、一方への加担は、裁判への干渉になる」であった。

キリスト者が見のがしてよいのか

提訴の前に、Bは父親に電話で謝罪したが、後に周辺の人びとに、「父親に電話したところ、父親が非を詫びた」と全く逆の話をつくりあげて宣伝した。このような白黒逆転の言い方は裁判での反論にも出てくる。

教団側の対応を見ると、九州教区は事実を認定し、教団本部にBの処分を求め、兵庫・京都・神奈川の各教区総会も、原告支援及びセクハラ問題の取り組みを推進する建議を採択したが、教団側は今日まで、Bを処分せず、A子に対する謝罪さえ行なっていない。

キリスト者、しかもそのかがみとなるべき牧師の、道にはずれた行動は、教団として深刻に受けとめ、迅速に対処せねばならない問題のはずだ。イスラム教であろう

と、仏教であろうと、信仰を説く立場の人間は、在家の人に比べていっそう重い責任を負わなければならないとされている。

責任者の監督責任は

セクハラで訴えられた横山ノック大阪府知事(当時)は、「選挙の対立候補の策謀だ」と言い、矢野暢京都大学教授(当時)も、「学内の対立相手の策謀だ」と述べて、男女間の問題を男同士の問題にすりかえ、被害者隠しを図った。Bの反論も同じだ。

「南京大虐殺や従軍慰安婦はなかった」と固執する一部の日本人の存在は、アジア諸国の怒りをいつまでも消えないものにさせている。「キリスト者であるからこそ、いさぎよく事実を認め、謝罪してほしい」と願うのは、筆者だけではあるまい。処分や謝罪の回避は、被害者のPTSDを悪化させるばかりである。

本件は、本来、裁判で決着するものではない。A子の場合、三年にわたる執拗なセクハラにも、断固、抵抗を貫いたことが、提訴を可能にした面はあるが、その代償

としてのPTSDのいたましさは格別である。仮に損害 A子さんの一日も早い回復を心から祈念する。そして賠償が全額認められたとしても、金で心身が回復するわ 「セクハラ問題」の根の深さを改めて問い直す忌憚ないではない。この裁判を支援し続けてきた一人として、ご意見とご異見の二一報をすべての読者にお願ひする。

【参考資料】

この裁判に関しては、A子を支援する市民を中心に、九州教区に賛同する教区やその他のキリスト者たちで、いくつもの支援グループがつくられた。結審後の九月一日、その支援グループの共催による集会、「完全勝利に向けて」 関西集会」は、大きな盛り上がりを見せた。当日の集会宣言と、訴訟の年表を掲載する。

《集会宣言》

二〇〇一年四月二三日に提訴されたセクシユアル・ハラスメント訴訟は、本年七月一日の第一〇回審理をもって結審し、一〇月七日に判決を迎えようとしています。

私たちは、原告が勇気をもって提訴した、このセクシユアル・ハラスメント事件を私たちが取り組むべき課題として受け止め、教団性差別問題特別委員会、九州をはじめとする各教区、市民グループなどにおいて支援体制を立ち上げ、裁判を傍聴し、毎回の報告集会を行ってきました。また、各教区・グループにおいてはセクシユアル・ハラスメントに関する学習会やパンフレットの発行など、遅きに失したとはいえ、この課題に対する取り組みを行ってきました。

このセクシユアル・ハラスメント事件は、キリスト教会の女性信徒に向けられた男性牧師による二年以上もの長期にわたるセクシユアル・ハラスメント（性的いやがらせ）でした。ここには、女性に対する男性の優位性、更に、信徒に対する牧師の優位性など、何重もの差別意識、差別構造が存在します。セクシユアル・ハラスメントが性差別であり、人権侵害であることはすでに明らかですが、キリスト教会もまた、他の社会と同様に差別を克服することのできない一組織形態であることを私たちは今改めて確認します。そしてその克服に向けて今後、私たちは最大限の努力をしていかなければなりません。

今日ここに参集した私たちは、教会におけるセクシユアル・ハラスメント克服への決意を新たにするとともに、一〇月七日に行われる、この訴訟の判決が、原告の受けた被害に則して正当な判決となるために、以下の点を訴えます。

一、私たちは、この訴訟の判決が、被害を受けた原告の心情・立場に寄り添う観点から行われることを求める。
一、私たちは、この訴訟の判決が、セクシユアル・ハラスメントにおける構造的性暴力の問題性を見据えた観点から行われることを求める。

二〇〇三年九月一日

裁判支援集会「完全勝利にむけて」 関西集会」参加者一同

(支援団体作成に基づく)

代理人のみの出席。

2002.7.16 【第4回審理】傍聴62名。原告Aさん、初めて出席。

ドクターの鑑定意見書、カウンセラーの意見書、本人の陳述書が提出される。
報告集会で原告本人が挨拶、現在の思いなどを語った。

2002.9.24 【第5回審理】傍聴85名。原告尋問。

この回に被告側の傍聴者としてB牧師本人と白川教会信徒3人が初めて来廷。裁判所は原告側からの遮蔽措置の申し出は退けたが、原告と被告の控室を別室に、また被告の傍聴席を2列目にするなどの処置をした。Aさんは当日まで、体調が心配されていたが、2時間半にわたり、明確な口調で勇気をもってセクハラ被害を証言した。

2002.10.29 【第6回審理】傍聴62名。被告尋問。

当初、証人尋問の時間は被告側1時間、原告側2時間の予定だったが、被告側が約20分延引し、原告弁護団からの時間不足との抗議により、次回にもう一度原告側による被告尋問を行うことになった。被告は、セクハラ事件が自分を追い落とすための陰謀という従来の主張を行なったが、細部に関しては「覚えていない」を連発し、質問の論点を意図的にはぐらかし続けた。なお、白川教会からは9名の傍聴者。

2002.10.29～31 第33回教団総会で性差別問題特別委員会が「廃止」になる。裁判支援連絡会是有志で活動を継続。B牧師への戒規の適用を求めた「札す会」提案の建議（不採択）、およびセクハラ問題への取り組みを求めた兵庫教区有志の議員提案による建議（採択）が提案される。

2003.1.14 【第7回審理】傍聴69名。報告集会50名。被告尋問2回目。裁判長、石田裕一氏に代わる。

裁判官による被告への異例の「説教」。被告側傍聴席5名。

2003.3.4 【第8回審理】傍聴63名。報告集会50名。被告側証人の尋問。

証人は当該教会幹事。セクハラ事件は被告を陥れようと画策されたもので、Aさんはそれに協力した、との主張。しかし、原告代理人の質問に対する答弁に至っては多くの矛盾点が露わになる。被告側傍聴席はB被告も含め8名。

2003.4.22 【第9回審理】原告側証人尋問。

証人はPTSDの専門家、原告の診断面接をこの間行なってきた。

2003.7.1 【第10回審理】最終弁論。傍聴57名。報告集会55名

判決にむけて、裁判長への葉書による要望活動。

2003.9.1 「完全勝利にむけて」関西集会。

2003.10.7 【判決】(予定)

2003.10.13 九州集会(予定)

セクシュアル・ハラスメント訴訟 年表

- 2001.4.23 日本基督教団九州地区内教会に1998年3月から勤務していたAさんが、同教会のB牧師からのセクハラ被害を訴え、総額1,100万円の損害賠償を求めて神戸地裁尼崎支部に提訴。「熊本白川教会のセクハラ訴訟を支える会」結成。
- 2001.5. 教団の九州、兵庫、京都、神奈川の各教区総会で、この件に関して、原告支援及びセクハラ問題の取り組みを推進する趣旨の建議が相次いで採択される。
- 2001.5.8 九州教区は調査小委員会を設置して調査に当たっていたが、調査結果を踏まえ、B牧師への辞任勧告と教団の戒規処分への手続きの開始などの内容を含む「教会内で生じたセクシュアル・ハラスメントを含む人権侵害事件についての声明」を議長名で発表。
- 2001.6. 教団性差別問題特別委員会の下にセクシュアル・ハラスメント支援連絡会が発足。
- 2001.6.18 【第1回審理】裁判長は吉田純一郎氏。傍聴約60名。
原告はPTSD（心的外傷後ストレス障害）による体調不良のため欠席。被告側は本人、代理人とも欠席で、原告代理人のみの出席。
傍聴席には兵庫教区をはじめ当該教区の九州のほか、大阪、西中国、東中国など各教区のメンバーや教団教師委員など多数がかけつけ、裁判所側は傍聴者の多さに、同時に予定されていた他の案件を先議し、本件を最後に回した。そのため開廷が30分遅れた。審理の過程で被告から熊本地裁への移送願いが出ていることが判明。
- 2001.6~7 吉田裁判長宛に、裁判の合議制と移送反対を求める葉書の要望活動を展開。
- 2001.7.19 神戸地裁尼崎支部（吉田純一郎裁判長）は、被告から出されていた「熊本地裁への移送願い」を却下、引き続き神戸地裁尼崎支部で裁判が続けられることが決定。
- 2001.9.16 熊本において有志の当該教会の会員が中心になって市民団体「熊本白川教会のセクハラ・人権侵害を糺（ただ）す会」が結成される。
- 2001.10. 教団教師委員会が原告の父親及び牧師に聞き取りを行う。
- 2001.10.23 B被告から大阪高裁に出されていた、再度の熊本地裁への移送申し立てが却下。
- 2001.12. 教団教師委員会が九州教区からの「戒規の要請」に対する文書での中間報告。「裁判で係争中の問題ゆえ最終判断を保留する」とする。
- 2002.3.5 【第2回審理】この回から3人の裁判官による合議制となる。裁判長は渡邊安一氏。傍聴約70名
原告側、被告側ともに代理人による出席。双方からの陳述書など約60点の書証確認のみで約15分で閉廷。その後、塚口教会で報告集会（65名参加）。弁護団から裁判の分析と今後の展望などの報告。原告家族からは原告のPTSDによる心身不調の様子などが話された。
- 2002.5.14 【第3回審理】傍聴約60名。報告集会58名。
原告は前日まで出席の予定だったがPTSDの症状が思わしくなく欠席、被告も欠席で

女の選挙をたたかつて――

ピンクの表紙の二八二号、覚えていらつしやいますか？

十四人の「いきいき女性」の顔が表紙。そのうち十一人が当選なさいました。

「その報告を」とお願いしたのが五月。どなたも新しい議会で大忙し。そのなかで、五人の方からお返事を頂きました。――すぐ掲載の予定がイラク対策に追われ、夏を越えました。

心の中で手を合わせながら、お待たせした熱い原稿をお届けします。そして、いっそうのご活躍をお祈りします。

日本を変えるか？この思い

宮城県白石市議会議員 吉田貞子

私は、二年半前の補欠選挙で当選以来、年四回の議会報告を手配りしてきました。最初は三〇〇部からでしたが、現在では一、〇〇〇部にこぎつきました。議会は「チェックと提言の場」と、毎回質問し、二五年間女性議員がいなかった市議会で、ジェンダーの視点からの発言は、市民に確かな評価を受けつつあると感じていました。しかし、選挙戦は、きびしいものでした。

前回当選直後、支持者から、「市民の生の声を聞いて欲しい、それができるのは女性候補者としてのあ



なただ」と言われたことがありました。しかしこの二年半、わずかな市民の声を頼りに、私の理念のみの議会発言ではなかったか。「吉田さんはいつも忙しそう」の声は、「もつとゆっくり私たちの声を聞いて」ということではなかったか、と感じさせられました。とにかく残された時間を、できるだけたくさんの方とお話することにしようと決意したのは、選挙戦一か月前でした。選挙体制を整えることは二の次にしました。市民の方がたの悩みは多く、一日に二、三人ということもしばしばありました。「選挙の時だけでなく来て」「本当に誰かに話したかった」と泣きながら訴える方もいました。

第一声で、私は初めて公約をのべました。①ホームページの開設 ②ミニ市政報告会の開催 ③皆さんとともに政策提言作り、です。誰もが言うことかもしれませんが、市民の方との交流が裏付けになっているので、言葉に力がありました。

焦りの日々の中で、次第に私を支援する方がたが、ボランティアで集まり始めました。けれど、周囲からじわじわと、票を取られていることも実感していました。トップ当選者は党まる抱え。二、三位は地域まる抱え。私と言えば、前回選挙の大量得票に加え、社民党公認は私一人だったことから、上位当選間違いなしの噂が最後までつきまといました。党公認と言っても、私は労組出身ではなく、自分で選挙体制を整えるほかありませんでした。従来の後援会組織はつくりたくないの思いもありました。金や地縁がものを言う選挙は、まだまだ根強いのです。選挙で回る車では、できるだけ降りることにしながら、辻まで入っていました。赤ちゃんを抱えた若いおかあさんから、「期待し

ています」と握手を求められました。遠くから走ってきて、「がんばって」と抱きつくおばさんは泣いていました。もし落選しても後悔はすまいとの気持ちがあわき上がってきました。

選挙戦終盤、「ひつpegにしてもひつpegがしても湧いてくる貞子の票」と恐れられました。五人の事務所体制で五位当選ができたのは、市民の目線で活動してきたことと、よき理解者たちの横のつながりのおかげだと思っています。市民の方がたとともに、人にやさしいまちをつくっていくのは、これからです。

他市ではありますが、同志の女性議員が落選しました。今、私は彼女に再度の決意を促しています。落選した女性議員への風当たりは、男性議員と比較するすべもないほど、精神的に厳しいものです。彼女の精神的支えになりながら、四年間の活動を共に創つていこうと話しています。また、近隣のまちの女性から、「立候補してみたいがアドバイスをもらえないか」と依頼されています。私の選挙戦で底辺が動いたとまでは、決して言い切れません。しかし、きっかけは投げかけました。私の存在は、二五年ぶりの女性議員の誕生。その時が「はじまり」なのです。

小さな力でも将来に繋げたい

新潟県広神村村会議員 星野邦子

私はこれからが女性の時代だと思っています。

今までは女性に辛く厳しかったけれど、私たちの世代から変えてゆけるのだと思うと、何となく

嬉しくなってきました。

その礎に私の小さな力が役に立つかと思うと、不思議に力がみなぎってくるのです。

私自身は楽天的な性格で、少し間抜けなところもあり、娘たちから「お母さん、おとぼけ言わないで……」と言われますが、私自身は大真面目で言っていることが多く「???」です。

そんなことが幸いして議員を続けていられるのかもわかりませんが……。

私の持つ力は小さくても、将来につながる細くて強い糸です。大勢の有権者にこの糸が支えられています。

広神村では女性議員は私一人ですが、先日、八月二六日に調印式を行い、市町村合併が本格的に決まりましたので、平成十六年十一月一日、魚沼市になれば六人になります。既に今までの五人でプライベートであちこち視察してきています。今回の選挙で入った方もお誘いして、また、新市に役立つことを目指したいと思っています。

現在 私自身は、農業に携わるお母さん方を後押しして、学校給食に地場産の野菜を使ってもらおうと努力しているところです。安心・安全な野菜を子どもたちに供給し、地産地消を推進することは地域に愛着をもってもらえるだけでなく、食糧自給率を押し上げることにもなります。

日本の農業の衰退に歯止めをかけることにもなります

学校給食がすべてご飯給食に変われば、日本人の身体は今よりは遙かに健康になるし、日本の農業を救う第一歩になる、と言っても過言ではありません。



ぜひ、お母さん方にもわかっていただきたいと思います。

議会では、誰も何も言わず、それで決まってしまうような雰囲気の場合でも「ちよつと待つて!!」「何故?」「どうして?」と問える勇気をいつまでも持ち続けて行きたいと思っています。

とかくあたり前のことが、あたり前に通用しない世の中ですが、自分が自分の人生の主役でいる限り、満足できるドラマにしたいと考えています。

二期目の選挙、石川県議会の場合

石川県議会議員 広岡立美



石川県の金沢選挙区は、年が明けてみると定員一七人のところ立候補を表明した人が一七人、そのうち女性は三人でした。立候補予定者といわれていた人も調整(?)で市議会議員選挙にまわる決心をしたとかで、このままでは無投票になるかもしれないとの報道まで流れていました。無風選挙で当選する人もきまつているのだからと、だれもまつたく関心がない状況でした。そんな中で、わたしは四年前を思い出しながら準備を進めていました。

告示一か月くらい前になって、新たに三人の立候補予定者が名乗りをあげました。その中に自民党関係の女性がいました。年代もわたしより少し

上、活動の分野も子育てやNPOと、わたしにとっても似ていました。これで女性の立候補予定者は四人になりました。

報道関係は女の戦いを強調するかのようにテレビ番組の特集を組んだり、新聞も取り上げるようになりました。全員が当選すれば女性議員の数は二人が四人になり一挙に二倍になります。そうなれば数は力です。男女共同参画も進むでしょうし、一歩前進です。

まわりの人たちは票の食い合いになるのではないかと心配していました。わたしはどうかというと、分野は重なつていても切り口が違うせいかな、ほとんど同席したことのない女性だったので、大きな心配はしていませんでした。

結果は、年のはじめに立候補を予定していた一七人で決まりました。残念ながら女性議員四人とはなりませんでした。女性議員は一人増で三人になったとはいえ、石川県議会全体では一割にも満たないままでした。市民の関心も薄く、投票率も低いものでした。

今回の選挙は四年前とは違って、住んでいる校下(小学校区)の方がたも応援してくださいました。それで応援団は三つになりました。地域と男女共同参画、国際協力、福祉、環境、子育てなどの市民グループとユニオンです。そのほかに家族や親戚や同級生なども大きな力になってくれました。

地域の人たちは全体の大きな流れを作る役を、市民グループはわたしがこれまでにやってきたことを広く伝える役を、ユニオンは実行部隊として細かな動きまで準備してくれました。この三つが気持ちよくまわり、選挙運動に参加してくださった地域の方たちから感謝の言葉までいただきました。目をひくようなきわだった候補者がいなかったことも幸いし、幸運な選挙でした。

選挙が終わって、二期目が始まりました。まったくの素人からのスタートでしたが、四年間経験を積

んだことで見えてくるものもあり、今、しっかり仕事をしなければいけないという、とても大きな責任を感じています。一年生議員の言ったことでも社会の流れを変える力になっていることもわかりました。

提案がすべて形になるわけではありませんが、県に男女共同参画条例ができ、子育てしながら仕事を続ける大切さを男性議員にも伝えることができました。これからは公約の一つである食品安全条例制定に向けて動かなければならないと思っています。DV被害者支援の民間のグループを立ち上げ、DVを社会全体の問題として提起できたことも成果の一つだと思っています。こしはシエルターシンポジウムの全国大会を石川県で開催します。やらなければならぬことが目白押しです。

議会が終わるたびに報告を兼ねた活動通信を届け、多くの人たちの声、特に大きな声をあげることの難しい人たちの、ささやきやつぶやきに耳を傾けていくつもりです。そんな声こそが社会の「おかしいな」を教えてくださいさるものだからです。そして、一緒に道を探していこうと、いま張り切っています。

「選挙を終えて」

山梨県都留市 清水絹代

「四年に一度のボーナス付きのお祭り」、まさにその感覚そのものの都留市議会選挙が終わった。

終わってみれば前回よりひどい買収合戦。ほとんどが主義主張の何もない候補者たちによる当地の、なんともなさけない選挙戦でした。

「金を使った順に当選する」「誰がいくら、どう使った」「こちらの陣営が一度金を配ったのに、それ以



上の金を配って、ひっくり返された」等々、買収に対する情報に事欠かない。それが当然とされ、市民（有権者）も、「やつぱり金を使わなきゃ当選できないよ。あなたも使えば……」と。そして、「清水さんの言ってることはもっともだけど、まだこの地域には早すぎる。時代がそこまで行っていないから無理だよ」と逆に説教される状況です。特に女性候補者が堂々と違反行為を繰り返して当選し、警察が動いているとのうわさが出るほどのひどい運動でした。前回も同様の手法でしたが、同じ女性として大変残念に思い、「女であれば誰でもよいのか」という課題の重要性を感じます。しかしこれほど市民の間で当たり前に流れている買収行為に対して、警察は決して動きませんでした。私も、知人数人の所に数名の某候補が金品を持って投票の依頼に来たことを聞いたので、文書で警察に訴えました。刑事課の職員が二人家に見えてお話を聞きたいとのことでしたが、結局「証拠を出してくれないければ調べられないので、こちらからは何も動きません」——それを言いに来たのです。証拠を調べるのが警察の仕事だと思うのですが、市民にそこまでやらせようというのでしょうか。

都留市は無法地帯です。ある権力と警察とのつながり、議員たちとのつながり等のうわさもあり、こんな状況の中で何回戦つても当選できるはずがないと、つくづく思いました。また、血縁の強さ、これもとてめかないません。親族ゼロ状態で理想選挙を戦うことのむなしさをつくづく感じました。

選挙広報もなく、ほとんどの候補者が単に議員になることが名誉と考えていて、市政に対して何の理念もなく、中には、人前で話することすらできない候補者が数名いました。ただ連呼のみで、どうしてこれから自分たちの生活に関わる市政の仕事をする人を選ぶのでしょうか。

今回一〇五か所で街頭演説をしました。市の財政状況、議員定数、議員報酬、合併問題等、直面している課題を市民と共に考え、行動していくための私の理念をしっかりと訴えました。反響も大きく「こんな話をする清水はすごい。こういう人を議員にしなければいけない。久しぶりに気持ちのよい演説をきかせてもらった」等、多くの支援の言葉をいただきました。少しずつ変わりつつはありますが、しかし根本的に意識改革がまだまだ遅いこと、特に女性が自立した考えをまだ持とうとしないことも大きな課題です。議会改革をしたい、政策立案で行政改革をしたいと楽しみにしておりますので、今、議員として活動できないことが非常に残念です。こんな選挙しかできない候補者、有権者に怒りさえ感じます。今できることは、行政との接点（「男女共同参画推進委員」・「市長と語る会世話人」）の中で声を出していくことと、婦選会館や都留文化大学（聴講生として）での政治の学習を続け、市民に何らかの形で発信し、市民の意識改革をうながす努力をすることかと考えております。

それにしても選挙って何でしょう。「普段の活動なんて住民は評価しないのよね」「選挙と議員活動とは別ね」——某市で議員をしている友人の声です。

私は思います。「選挙と政治は一体ではない。選挙はボーナス付きのお祭りだ」と……。残念ですが都留市民のこれが今の意識レベルです。「民度の低さがこの結果だ」と表現した方もおります。

クオーター制、そしてある一定レベルの地方自治に関する知識とまちづくりへの創造能力（最低でも読める、書ける、話せる）の試験が必要と、我が市の議員の資質を知る限り思います。これからの地域分権社会は、一人ひとりが責任ある仕事と社会活動をするために、まず今は議会改革が一番必要だと考えています。

その一案として、選挙公費のあり方、候補者の「ポスター代」や「燃料代」の不正受理を、外側から

の発信ですが、私の政治団体便りの中で市民に発信したいと思っています。ポスター代は正規金額より二〇万円以上多く受けとっています（上限金額を請求し、差額を業者がバックするのが慣例になっています）。「住民の為に正しいと思うたら信念を決して曲げないで進むこと。これがなければ改革はできない」。昨春秋、田中長野県知事の講演会（東京）での言葉です。私もそう思います。

県議会の無投票阻止をして

愛知県 吉川富士子

（名古屋市瑞穂区〈瑞穂・テイセンター えんがわ〉代表）



無謀な選挙だったと思います。しかし、何かの力に突き動かされ、とにかく無投票を阻止しよう、その思いだけでした。今回、統一地方選に向けた〈女性と政治キャンペーン〉の愛知の実行委員を務めました。何度もお断りしたのに、ほかに誰もいないからと。それで軽い気持ちで、私が主宰している宅老所（えんがわ）で、おひな祭り会をかねて、皆で一分間スピーチをして、「女性を議会に！」という横断幕を持って写真を撮ればいいと思っていました。ところが賛同者の一人から、やはり、記者会見をしてキャンペーンもしましょうと提案されて、栄（名古屋の銀座のようなところ）

で横断幕やのぼりを持って、キャンペーンをしました。

「愛知県議会は定数一〇七人ですが女性の議員は何人いると思いますか。たったの三人です。中部空港や万博などの巨大な問題を抱えている中で、私たち女性の声は届いているでしょうか。もしあなたの地域で女性が立候補されたら応援してあげてください」と――少人数でしたが、ピエロや魔女に扮したり、私が南京玉すだれをしたりしてアピールしました。新聞三紙が大きく取り上げてくれました。

ところが、三月二九日の新聞に県議会無投票区二四区とあり、私の住んでいる瑞穂区も入っていたので、悶々としました。なぜなら人口が十万三千人なのに、市会も県会も女性議員はいない、女性の立候補者もない、県会は無投票。これでいいのだろうか。四月二日、私は選挙管理委員会に行き、どうすれば立候補できるのかを聞き、六〇万円の供託金を法務局に納めればできると知りました。夫の諒解をとり、徹夜で書類を書きました。翌日、〈えんがわ〉のお花見があり、反省会を四時に終えました。それから区役所で戸籍謄本と住民票をとり、法務局に行き、供託金を納め、区役所に戻って選管で事前審査を受け、県庁にまた行き、記者会見を終えたのが九時過ぎでした。そして四日に立候補届けを出しました。十三日の投票日まで、あつという間の選挙戦でした。

とりあえず供託金が戻ってくるように、ひとりで自転車で回ろうと思っていました。ところが仲間がデジカメとパソコンを使ってすてきなボスターを作ってくれ、カラーコピーしようと思いましたが、雨が多く、急きょ印刷を頼み、四日の夜に出来上がり、翌日、息子が友達と一日で張ってくれました。街宣車も無投票当選で当選された方の後に、名前を書き換えて借りることができました。新聞を見てびっ

くりした人たちが、次つぎと来てくれました。運転やアナウンスも手伝ってくれました。県会は、はがきが八、〇〇〇枚もいただけたということ、どうしようかと悩んでいたら、かわるがわる来てくれた人たちが知恵を出し合い、原稿から印刷、宛名書きと取り組んでくれました。五、九〇一枚を郵便局に持って行きました。

最終の十二日には、十六人が集まることになり、せっかく大勢集まったのだから、皆でやれることをしようと、商店街のウォーキングをしました。〈女性と政治キャンペーン〉のテーマカラー、シヨッキングピンクの布を使い、のぼりやスカーフ、リボンにして、「県会に女性を」「県会に女性の声を届けましょう」と、雨の中を練り歩きました。匿名の高齢の女性や焼きそば屋のおばさんから、「頑張りなさい」と電話をもらい、勇気一〇〇倍でした。

五、七九三票、思いがけない票に、「おめでとつ、供託金が戻ってきてよかったね」と、落選をしたのに、皆が喜んでくれました。五月三日におしゃべり会を開いたら、二二人の方が集まり、「楽しかったのでまたやりましょう」とか、「今回もう一週間早かったら」と残念がつてくれました。

カンパも思いがけず集まり、街宣車でお金を使ったのに、公営適応でレンタカー代が支給されたので、自己資金は数万円ですみました。ただ、事務手続きが私には難しく、選挙運動収支報告書を出し終えたのが六月三日でした。

ほんとに多くの方に助けられ、感謝でいっぱい選挙でした。私が出たことで、皆さんが少しでも政治に関心を持たれ、女性が「私も立候補しよう」と思う人が出てくれば嬉しい限りです。四年後のことは、〈えんがわ〉の活動を充実させながら、そして政治のことを学びながら、考えていこうと思っています。

埼玉県・知事選に思う

小出菜津子

(埼玉新聞社 編集局政経部)

記者になってから二年目（会社に入ってから五年目）の夏、私は埼玉県知事選を取材しました。私は候補者の一人である坂東真理子氏を担当し、取材を通じて改めて「理想の候補者」について考えさせられました。

即日開票があつた八月三十一日夜、イメージカラーの黄色いＴシャツを着た支持者が詰めかけた坂東氏の事務所は落選であつたにも関わらず、熱気に包まれていました。支援団体の女性代表は「このような選挙をする機会をもつたことを誇りに生きていきたい」と涙ながらに語り、坂東氏と約二十人の女性支援者たちは「ありがとう」「よくがんばったね」と抱き合いながら健闘をたたえあつていました。みなさん泣いていたのですが、その姿は選挙で負けた人たちとは思えない、何か明るさが漂う光景でした。がんばったことに満足している、試合に負けた女子学生のように見えてしまいました。



土屋義彦・前知事の辞職のために行われた出直し知事選。坂東氏は「政党や組織に頼らずしがらみのない政治がしたい」と理想を掲げて、ボランティアとカンパのみの選挙を展開。陣営は堂本暁子・千葉県知事選の無党派選挙を指揮したアドバイザーを招き、また坂東氏の元副知事としての知名度も手伝って注目を浴びていました。

しかし、結果は新知事となつた上田清司氏に約六十万票の差をつけられ惨敗。

私は選挙期間中、ずっと「どんな人に埼玉県知事になってほしいか」と考え続けていました。条件だけで見ると坂東氏はびつたりの候補者でした。

まず、前内閣府男女共同参画局長で働く女性を支援する政策を打ち出していたこと、物事をはつきり話す人で隠し事がなさそうだったこと。坂東氏自身も「言葉と行動が一致した」と言うとおり、本当にボランティアとカンパで選挙を乗り切っていたのでしがらみのない政治が期待できると、一票を投じる

理由はたくさんありました。きさくで好感のもてる人でもありました。事務所で熱心に働いていたボランティアの方がたもこんなところに魅かれたのだと思います。

でも県知事になってほしいかというと、私の頭の中に「？」が浮かんではしまうのです。

例えば投票日前日の街頭演説で、自分に対して誹謗中傷が流れていたことを応援弁士の方から聞くと、坂東氏はショックを受けたようで「選挙はうそで攻撃することは聞いていましたが、そこまで言われていたとは。汚い戦術に断固立ち向かいます。ひどいことを言ってる人を連れてきて下さい！」と怒りをあらわに見せました。その時、私の「？」は大きくなったのです。

悲しいことですが、選挙中に誹謗中傷が流れるのはよくあること。もちろんそれに対して坂東氏が怒るのも当然ですが、そこに「クリーンなことしか知らない優等生の危うさ」みたいなものを感じてしまい、「知事になってから大丈夫なんだろうか」と少し心配になってしまいました。

坂東氏の公約や話している内容はよかったです。そして坂東氏は真面目な方なので知事になってからも一生懸命やってくれるであろうことは予想できました。しかし、保守政党が大多数を占める埼玉県議会は理論の正しさだけでは乗り切れない局面があることもまた事実です。

お金に汚い人は知事になるのはいやだけれども、自分の正しさを誇る人でも困る。密室で行われる政治には嫌気がさしているけれど、かといって根回しできないようでは議会は進まない。ほどほどの清潔さと時々ずるいこともやるようなしたたかさを持つ人。そんな人が私の「理想の候補者」だったようです。政治の世界を乗り切るには、坂東氏の演説は少し優等生すぎるように思えました。

敗戦が決まった開票日の夜、坂東氏は最後まで笑顔でした。途中、花束をもらって泣きそうになりましたが、後ろを向き、最後まで報道陣に涙の写真を撮らせませんでした。出馬会見では三回も泣いていたのに……。その時、私は初めて坂東氏から「優等生的でない」力強さを見た気がしました。

朝鮮半島と日本の平和を考える

―拉致事件の背景にある日朝不正常関係史を中心に―

北川 広和

マスコミに足りない“思いやり”

私は『日韓分析』という資料集を一九八〇年の一月から月刊で出しています。これは朝鮮や韓国の情報をもそのまま載せてあるわけではなくて、日本の新聞七紙（朝日・毎日・読売・産経・日経・東京・赤旗）に目を通し、その中から朝鮮半島関係の記事を抜き出して、マスコミ批判を通じて朝鮮半島情勢をどうみるか、書きつづけています。

最近「新聞には思いやりが足りない」ということを強く感じます。今の日本の新聞報道はアメリカを背景にして、アメリカを背負う形で朝鮮半島の方を向いて、朝鮮民主主義人民共和国は「恐ろしい国だ」という情報を流し続けているのが現状だと思います。例えば朝鮮は今、「核をもてあそぶ瀬戸際外交を繰り返している」ということが決まり文句のように出てきます。でも、誰が瀬戸際に追い込んだのか、なぜ追い込んだのか、ということ明らかにすることが、マスコミの本来の役割ではないでしょうか。

八月二十七日から北京で「六者協議」が行われています。この協議の中心は「北の核問題である」というのが一般的な見方です。しかし、六か国の「北の核開発」についての意見を見ても、例えばロシアは「朝鮮半島の非核化のための努力を」、韓国は「核放棄と朝鮮半島の非核化を促す」、中国は「朝鮮半島の非核化の確保が必要」とあります。これはどういうことかという点、「北の核」だけではないということです。朝鮮半島の南に駐留している米軍は、いつでもそこに核を持ち込んで、ピョンヤンに向けて撃つことができます。日本の横須賀基地から出港した空母からトマホークを積んだ戦闘機が飛んでピョンヤンを襲うこともできます。そういうことを全部勘案して、ロシアや韓国や中国は「朝鮮半島の核問題」あるいは「朝鮮半島の非核化」という言い方をしていると思います。朝鮮を糾弾するための六者協議ではなく、朝鮮半島全体の平和のために誰がどうしたらいいのか、どういう譲歩ができるのかということとを本来は話し合う場だということです。しかしアメリカは「譲歩措置は用意しない」と言っていますので、これはなかなか進まないでしょう。

六者協議に日本は「拉致問題」を持ち出して、五者で北朝鮮に圧力をかけたという立場を表明しました。しかし拉致問題に言及したのはアメリカだけです。韓国も拉致問題については言及していない。結局拉致問題は「日朝二国間で解決すべき問題だ」ということを明確に意味しているということです。

では日朝二国間で話し合うのは拉致問題だけですかといえ、日朝間には固有に解決すべき懸案事項もたくさんある。そして、その原点は何か。拉致事件にしても、結局日朝間に国交がない不正常な関係の中で起きた問題であるわけです。このことは、昨年九月十七日に日朝首脳会談が行われて、その結果を聞いた福田官房長官が「拉致事件は国交のない状態下において起こったというのが前提にある。戦争状態ではないが、戦争状態の継続のような状態にあった」とはつきりと発言しています。

また、日朝ビヨンヤン宣言に「双方は、国際法を順守し、互いの安全を脅かす行動をとらないことを確認した。また、日本国民の生命と安全にかかわる懸案問題については、朝鮮民主主義人民共和国側は、日朝が不正常な関係にある中で生じたこのような遺憾な問題が今後再び生じることがないよう適切な措置をとることを確認した」とあります。これは明らかに拉致問題が「不正常な状態の中で行われた」ということを指しているわけです。

日本が朝鮮半島全域を植民地支配した戦前・戦中時代

拉致問題と朝鮮半島との歴史的関係を見ていくと、「戦前・戦中時代」「日本人拉致に至るまでの戦後の不正常な日朝関係史」「九・一七ビヨンヤン宣言以降の現在の状況」の三つの時期に分けられます。

まず初めに「戦前・戦中時代」、日本が朝鮮半島全体を植民地支配していた時代の問題です。

今年七月十二日、江藤隆美という自民党の長老議員が「日韓併合は両国が調印して国連が無条件で承認したのに、九〇年経ったらどうして植民地支配になるのか」というデタラメなことを言いました。併合当時の一九一〇年には、国連はまだありません。また正式な調印をしたかのように言っていますが、武装した兵士が取り巻く中で、脅して調印させようとしたのが実態です。朝鮮皇帝の高宗(ゴジョン)は押印を拒否したし、一部の閣僚も押印を拒否したのですが、無理矢理「韓国を併合した」ことにしてしまったわけです。

一九一〇年の「韓国併合」までの過程、すでに一九世紀末から一九一〇年にかけての時期そのものが、朝鮮半島から見ると「日本が暴力的にどんどん侵略してくる時期」と位置づけられます。例えば一八九

五年には王妃である明成皇后(閔妃)が日本軍に殺害されて焼かれるという事件が起きました。一九一〇年、日本は韓国を併合すると、土地を奪い、農作物(特に米)を奪い、金銀などの貴重な鉱物資源を奪いました。また朝鮮語の使用を禁止して、日本語の使用を強要しました。アジア太平洋戦争中には「創氏改名」も強制しました。これについては自民党の麻生太郎議員が東大で講演したときに「創氏改名というのは朝鮮人が働きの口がないから、働きの口を見つけるために日本名にしたいと言った。朝鮮人が日本人に頼んだから日本名を与えてやった」と言いましたけれども、実は創氏改名によって「朝鮮名を使うな。日本名に変えろ」と強要したんです。あるいは皇国臣民として誓詞をとなえさせ、神社参拝を強要しました。独立運動家も次つぎに逮捕して、拷問にかけて殺していきました。

それだけではありません。男性の徴兵・徴用と称して日本に連行して炭坑などで強制労働させたり、地下壕などの軍事施設を掘らせるなど、ただ同然で働かせました。そのために連行してきた若い朝鮮人男性は少なくとも百万人、在日の研究者によれば二百万人から三百万人という調査結果が明らかになっています。一方、若い朝鮮人女性については「従軍慰安婦」にしてきたわけです。「いい働きの口があるから」と騙したり、あるいは本当に有無を言わず連行するなどして、日本軍兵士への売春を強制させられた。この強制連行についても従軍慰安婦についても、日本政府は朝鮮政府に謝罪も償いもしないということを忘れてはならないと思います。私たちは、拉致事件も従軍慰安婦問題も含めて、過去の問題全般を解決できる道を選ばないといけないと思いますし、今マスコミ中心に行われているような、「従軍慰安婦などの問題は過去の問題で、現在の問題は拉致問題なんだ」という形で朝鮮だけを非難する立場からは、問題解決の道は出てこないだろうと思います。

ただ、戦前戦中の日本軍の蛮行があったからといって、拉致の罪が消えるわけではない。「日朝国交が

なかったから起きてしまったのだ」という一言で済ませることはできません。なぜ「拉致」ということが起きてしまったのか、考える必要があると思います。

戦後の日朝不正常関係史・日本人拉致に至るまで

一九四五年八月、日本の敗戦によつて朝鮮が解放されましたが、三年後の一九四八年八月に、南では大韓民国が単独選挙を行なつて先に成立します。北でも翌月に朝鮮民主主義人民共和国が成立します。それから二年とたたない一九五〇年六月、朝鮮戦争がぼつ発し、南北に分断された同じ朝鮮民族が殺しあふ悲惨な戦争が起こるわけです。

三年後の一九五三年七月二七日、休戦協定を結ぶことによつて停戦しました。今年七月で停戦五十周年を迎えたのですが、しかし、平和協定ではなくて、いまだに戦争を「休んでいる」という状態でしかない。いつでも戦争ができるという緊張状態がずっと続いているんです。

その休戦協定から一年半後の一九五五年二月に、南日(ナム・イル)という朝鮮の外相が、日本に「関係正常化」を求める訴えをするわけです。「我が政府は我が国と友好関係を持つとうとするすべての国家と正常な関係を樹立する用意を持っていたし、まず相互の利益に合致する貿易関係と文化的連携を設定することを希望してきた。日本が我が国と右のいろいろな関係を樹立することは、両国人民の切実な利害に合致するばかりでなく、極東の平和維持と国際緊張の緩和に大きく寄与するだろう」という言い方で、朝鮮側から日本側に対して関係正常化を呼びかけました。しかし五五年六月、鳩山首相は「韓国との国交正常化に努力しているので、できない」と断つてしまふんです。

一九六一年六月、池田首相は「釜山赤旗論」を展開します。「共產主義勢力が南を赤化して釜山に赤旗が立つたら日本が大変なことになる」という、露骨に朝鮮を敵視する発言です。それに対して朝鮮側は同年九月に第四回朝鮮労働党大会を開催します。この大会は以後十年おきに開かれますが、第四回の報告では「米帝国主義批判」が中心になりました。日本に対しては「日本政府は我が国を敵視している。けれども日朝国交は両国人民にとって有利なことである」という総括をしている。池田首相の発言にもかかわらず「日朝国交正常化をしたほうがいい」という立場をとっています。

恨みを植えつけた日韓基本条約

さらに一九六五年六月、日韓基本条約が結ばれ、日朝国交正常化が成立します。その中の第二条には「日本と韓国が結んだ旧条約はもはや無効である」と書かれています。この「もはや」をいつに設定するかということで、双方違う解釈をする。韓国側は「一九一〇年の韓国併合から無効」という立場を表明するのですが、日本は「一九五一年のサンフランシスコ講話条約が結ばれた時点までは有効だった」という解釈をする。「日本による韓国併合は合法的に行われた」という論を展開することができるような言葉として「もはや」の一言が挿入されたわけです。さらに第三条では「韓国が朝鮮半島にある唯一合法的な政府である」と規定し、事実上「朝鮮民主主義人民共和国は正式な政府ではない」と言っていました。

この日韓基本条約とともに結ばれたのが「無償三億ドル、有償二億ドル」という、当時としては大変な金額の資金供与を行うという協定です。そのお金は「独立祝賀金」であり「経済協力」であるという

名目です。「植民地支配に対する謝罪・償い」としての資金供与ではない。実際日韓基本条約には「謝罪・償い」の言葉もなく、「反省」「過去」「植民地」という言葉すらありません。一切過去を振り返らない形で日韓基本条約が結ばれてしまった。当時の朴正熙（パク・チョンヒ）軍事政権には「金をもらえればいい」という考えもあつたわけですが、韓国民衆の心の中にはやはり、日本の植民地支配に対する「恨（ハン）」があつた。「恨五百年」と言いますが、日韓基本条約によつてむしろ「恨」は深まってしまったという状況があります。

一九六九年十一月には佐藤・ニクソン会談が行われ、「韓国の安全は日本自身の安全にとつて緊要」という「韓国条項」を日米共同宣言の中に盛り込みます。「アメリカを頂点とした日米韓三角軍事同盟化を強める」ということを宣言したに等しい共同宣言であつたということです。それに対して朝鮮側は一九七〇年十一月、第五回朝鮮労働党大会で、アメリカの帝国主義批判にとどまらず、韓国の軍事独裁政権批判を強め、韓国内において「革命的暴力を準備せよ」という、かなり過激な指摘をする。当然これは「韓国に対する工作活動を強める」というニューアンスも含まれていると思います。そして日本に対して「日本軍国主義が復活した」「我が国を第一の攻撃目標としている」という言い方をして、日朝関係正常化についての呼びかけは全く姿を消すことになります。

しかし、一九七一年末から状況は変わってきます。十二月に日本では「日朝友好議員連盟」が超党派で結成されます。翌七二年一月には朝鮮の金日成（キム・イルソン）首相（当時）が読売新聞との会見の中で「日本との友好関係を望む」「日韓条約は障害ではあるが、必ずしも取り消す必要はない」という発言をします。四月には日本政府が朝鮮総連代表団の再入国許可証を交付します。在日朝鮮人は朝鮮に帰ったら二度と日本には入れなかったのですが、再入国許可証を交付するようになったのです。七月に

は「七・四南北共同声明」が発表され、「自主・平和・大同団結」の統一三原則がうたわれました。この七〇年代初頭には、いわゆるデタント（緊張緩和）が東アジアにも訪れて、平和的な空気がやってきました。この時期が、日本にとっては朝鮮との関係を改善する絶好の機会ではなかったかと思えます。

ところが、緊張緩和の流れを断ち切って、むしろ緊張を激化させる動きを見せるのが韓国の朴政権です。一九七三年六月に「南北クロス承認・国連同時加盟」を求める特別宣言を発表します。南北クロス承認というのは、アメリカと日本が朝鮮を承認して、当時のソ連と中国が韓国を承認することです。国連同時加盟については一九九一年に実際に実現しますが、一九七三年当時は「南北共同声明」の趣旨からすれば、せつかく一つになるうという方向に向かったのに別々の国として国連に加盟する動きは「裏切り行為」というわけで、朝鮮の朴政権批判は強まることになります。さらにその二か月後の八月八日には、KCIAが金大中（キム・デジュン）大統領候補を東京から白昼堂々と拉致するという事件が起きました。これによって朴政権は日本政府に対して負い目を感じるようになるわけです。

ところが、翌年の一九七四年八月十五日、「文世光事件」が起きます。これは、在日韓国人の青年が派出所から拳銃を奪い、韓国の光復節式典に参加して朴大統領の殺害を狙ったのですが、外れて、隣にいた大統領夫人を殺してしまったという事件です。その在日の青年がなぜ嚴重な警戒の式典に拳銃を持って入って、一番前の席から至近距離で狙うということができたのか。そうした疑問点もありますが、朴大統領は「朝鮮総連の仕業」と決めつけ、日本政府に規制・弾圧を要請しました。日本政府はただちにこれを受け入れて、十一月には当時の宮澤外相が朝鮮からの訪問団を不許可にするなど、日朝間交流の凍結を宣言します。

一九七五年五月には、朴大統領が「大統領緊急措置第九号」を発令し、民主化運動を徹底的に弾圧し

ます。八月には三木・フォード会談が行われ、「韓国の安全が朝鮮半島の安全に緊要であり、朝鮮半島の平和維持は日本の安全にとって必要である」という内容の「新韓国条項」を結ぶことによって、朝鮮敵視を日米一体となつて強めます。一方、金日成主席が十月に『読売新聞』との会見の中で「日本当局は米帝国主義の戦争政策に追随している」と、日本批判を展開します。これまで、労働党大会の中で日本批判はありましたが、金日成主席自身が日本批判をするのはこれが初めてでした。さらに「米朝関係が改善されるまで日朝関係の進展もないだろう」と言い、先に日朝関係を改善するのは無理だという見解を明らかにします。

そうした中で拉致事件が起こったのです。七〇年代にはかなり厳しい日本批判がされたわけですが、でも、「南を解放するために工作活動を強める。その拠点として日本を利用する。あるいは日本を中継して南に入る」ということも、少なくとも七〇年代には行われていたと考えられます。その流れの中で「拉致事件」も起こったと考えられるわけです。

日本政府が認定した拉致事件は一〇件一五人で、一九七七年二人、七八年九人、八〇年三人、八三年一人です。八三年はヨーロッパで行方不明となつた有本恵子さんですが、朝鮮側は拉致とは認めていません。一九八〇年には第六回朝鮮労働党大会が開かれます。ところが第七回大会はまだ開かれていません。

二〇年以上も開かれていないので、第六回大会が今まで開かれた中の最後の大会になるのですが、その中で「一民族一国家二体制二政府」の高麗民主連邦共和国構想が提案されます。これは「朝鮮民族は一つの民族であるから、一つの国家として国連に加盟しよう。しかし社会主義体制・資本主義体制という体制の違いは認めざるを得ないから、それぞれを統括する政府があつていい」ということです。それまでは北は「南を解放する」という路線をとっていたと思われませんが、政府よりは党のほうが支配力を持

っているのが朝鮮の体制ですから、党大会によって南への革命路線を放棄して連邦制統一に転換したと見ることが出来ます。このときは日本に対する批判は一切ありません。しかし、日朝国交正常化についても一切触れられていない。「日本」という言葉すら出ていないのです。

このように戦後、朝鮮側から何度か日朝国交回復について申し出があつたにもかかわらず、日本は一方的に断つてきたという経緯があります。実際に拉致事件を起こしたのは朝鮮の特殊機関であるわけですが、朝鮮国内に「日本の体制は戦前と全然変わっていない。朝鮮の植民地支配を謝罪する気持ちはない」うえに、関係改善の申し出にも応じない。さらにアメリカと一体になって朝鮮を敵視している」という見方が徐々にふくらみ、一九七〇年代後半の朝鮮側の対日工作活動が活発化する中で、拉致事件を引き起こしてしまつたという側面があるのではないかと思います。

現在も解決に至らない拉致のねじれ現象

二〇〇二年九月十七日の「日朝ビョンヤン宣言」が発表され、その十日後に日本政府調査団が訪朝します。朝鮮側が「生存している」と伝えた拉致被害者に面会するためです。同時に朝鮮側が調査報告書を提示しました。

十月十五日、生存していた拉致被害者五人に「一時帰国」が認められ、帰国します。当初は「朝鮮は帰国を認めないのではないか」とも言われていましたが、土壇場になつて帰国が認められました。

一時帰国の最中に、家族連絡会が「被害者五人をこのまま日本に留まらせてほしい」と日本政府に要請します。はじめの段階では「一時帰国であつて、その期間が過ぎたら朝鮮に戻す」という約束があつ

たからこそ、「それを破棄して留まらせてほしい」という要請を家族会が出したわけです。それに対して日本政府は十月二十四日に「五人を朝鮮に戻さず、日本に永住させる」と明らかな方針転換をします。ここから拉致の「ねじれ現象」が起こるわけです。

十月二九・三〇日には第十二回日朝国交正常化交渉がクアラルンプールで開かれます。この日朝交渉は一九九一年一月から始まりました。しかし昨年の交渉で日本側は「拉致問題と核問題の解決なくして、日朝国交正常化交渉に応じることはできない。したがって経済協力もできない」と言いました。日朝国交正常化交渉の場で「国交正常化交渉はできない」と宣言してしまったのです。

日本国内ではマスコミを中心に、家族連絡会や拉致議連も「罪を犯したのは朝鮮だから、被害者の子どもたちを日本に戻すのは当然だ」という主張を次つぎと展開するという状況が起きています。

ただ、中にはごく一部ですが「拉致被害者五人をいったん子どもたちのもとへ帰して説得させるべきだ。そのほうが解決は早いのではないか」という意見も出ています。

実は『産経新聞』にもこんな記事が載っているんです。「韓国へ行くと、韓国の政府高官や与党の議員が『日本は五人を北へ帰すことで合意しましたよね』『五人を北へ返せば、話し合いでいずれ問題は解決するのではないですか』と言っている」という記事です。「韓国の議員が北と同じことを言っている」と批判する記事なのですが、私も実は「五人が直接朝鮮へ行つて家族と話し合ったほうが早く解決する」と思っています。

拉致被害者五人の親たちは、もちろん自分の子どもが大事です。それと同様に、拉致被害者本人にとっても、親よりも自分の子どものほうが心配でしょう。しかし今、五人は自分の本心が言えないような状況ではないでしょうか。一挙手一投足が報じられるわけですから、一切自由が認められていないに等

しい状態です。「戻ったら二度と日本に帰れない」という心配があると言われていますが、曲がりなりにも朝鮮が日本に五人を一度返したということは、誠意の現れであり、それを逆手に取った日本側の姿勢によって、問題がこじれてしまったということが言えると思います。

では、日本はどうすべきか。拉致事件もやはり日朝関係が不正常な状態で起こったことです。やはりまず日朝関係を正常化する、国交正常化の交渉を行なうのが原点であり、基本だと思います。日朝ピョンヤン宣言については確かにいろいろと問題点があります。「過去の清算を経済協力で終わらせてしまうのではないか」と読める部分もありますが、しかし、ベースになるのはこれしかないわけです。これを基本にしながら、より良い日朝間の条約をどう作っていくかという中で、民衆側から「経済協力だけではだめだ」あるいは「個人補償を切り捨てるな」という訴えをしていくことが必要だと思います。

もし日朝条約が締結され、日朝国交正常化が実現さればどうなるでしょう。

日本政府は「北の脅威」をおおって有事法制を成立させました。それに先立って一九九九年には周辺事態法も成立させ、いつでも戦争ができる状況をどんどん作り、その先には憲法九条「改悪」が明らかに視野に入ってきているわけです。しかし、「朝鮮は脅威ではない」という状況を作り出せば、戦争準備の口実をなくすることができるわけです。イラク派兵法を成立させて「次は朝鮮」という危険性もある現在、日本の戦争国家化に反対していくと同時に、「日本が朝鮮半島の平和に貢献できる道は、まずは日朝国交正常化である」と、地道に訴えていく必要があると思います。

(きたがわ・かずひろ)『日韓分析』編集人・(日韓ネット) 共同代表

「在韓米軍」に抵抗する韓国人の心と

写真展「記憶と記録のトライアングル」韓国ツアーに同行して

旅する写真展

芦澤礼子

写真展「記憶と記録のトライアングル——韓国・在日・沖縄を撮る10人の眼」は、一通のEメールから始まった。昨年十月、沖縄に生まれ、沖縄を撮り続ける写真家・石川真生^{まお}さんに韓国の写真家グック・スヨンさんから「貴方のホームページを見ました。ぜひ会いたい」というメールが突然舞い込み、その翌月にはグックさんとやはり写真家のシン・ドンピルさんが本当に沖縄にやってきた。二人は米軍基地を取り巻く沖縄の人びとを数多く撮影してきた石川さんと意気投合。「韓国、沖縄、日本で『米軍基地』の写真展をやろう」と、盛り上がった。

石川さんは大急ぎで知り合いの写真家に声をかけた。旧知の比嘉豊光さんと、奄美人の母・アメリカ人の父を持つジャン・松元さん。それに大阪の友人、牧田清さんと在日韓国人の写真家ベ・ソさん。一方、韓国でもグックさんとシンさんの呼び掛けに三人が応じ、十人が揃ったのが今年初め。「韓国・朝鮮と日本の関係」「戦争の傷跡」「差別」「在韓・在日米軍」の四つのテーマを掲げ、沖縄・大阪・東京で写真展の実行委員会が発足。三人の企画は実現へと走り出した。

六月二十四日、ついに沖繩で写真展開幕。五人の韓国人写真家も揃って来沖した。

韓国の五人の中で最年長、四十五歳のイ・ヨンナムさんは、昨年六月十三日に米軍基地が集中する京畿道バジユ市で起こった「米軍装甲車による女子中学生二名轢殺事件」の現場に真っ先に駆けつけ、彼が撮った二人の無惨な遺体の写真は韓国人の怒りを巻き起こした。

六月二十四日夜に行われたシンポジウムで、石川さんは轢殺現場の写真に触れ、「どうしてその写真を発表できたのですか？ 中学生の親をどう説得したのですか？」と質問した。イさんは「最初に撮ったときは公表しなかったが、加害米兵に無罪の判決が出て公表を決意した。女子中学生の親には、不平等なS O F A（韓米地位協定）を変えるために必要なことなのだ」と説得し、わかってもらえた」と説明した。

七月、写真展は大阪、東京を巡回した。韓国の五人は大阪にも東京にも揃ってやってきた。イ・ヨンナムさんは大阪から写真をガラツと変え、それまで公開していなかった女子中学生轢殺現場の写真を公開した。写真は大きな反響を呼び、「こんな残酷なことがあったなんて……」と多くのコメントが感想ノートに寄せられた。

「ストライカー部隊」抗議行動

八月十三日から二十二日までの「記録と記憶のトライアングル」を締めくくるソウル展に合わせて八月十三日から五日間、写真展大阪実行委員会の企画で韓国ツアーが計画された。東京実行委員会に関わった縁で、私も参加を申し込んだ。日程の中にはイ・ヨンナムさんの案内でバジユ市の米軍基地を巡る計画も入っていた。

あと数日で出発という八月八日、大阪から衝撃的なメールが回ってきた。

「イ・ヨンナムさんが警察に連行された！」

八月七日午後五時四十分、韓総連（韓国大学総学生連合）所属の大学生十二人が、京畿道ポチョン郡にある米軍ヨンピョン射撃場に侵入し、装甲車によじ登ったり星条旗を燃やすなどの抗議行動を行なった。この射撃場では七月三十一日から米陸軍初の迅速機動旅団「ストライカー部隊」が訓練を行なっている最中だった。全世界どこでも九十六時間以内に実践配置ができることを目標にした最新鋭のこの部隊は、今年の秋にイラクに派遣されると伝えられているが、米軍指令部の公報室長が「韓国有事に迅速に展開するため『韓国の地形を学ぶこと』に訓練の目的がある」とコメントしたため、「朝鮮半島の戦争の脅威をおおるもの」として市民運動の猛反発を招いていた。

「米軍撤退！」「ストライカー部隊は帰れ！」と叫びながら射撃場に走り込む大学生を、イ・ヨンナムさんのカメラが追っていた。十二人は米軍に捕らえられ、そのまま韓国警察に連行された。そのときにイさんも一緒に連行されてしまったという。「アジアプレス・インターナショナル」の日本人記者も連行されたが、翌日釈放された。しかしイさんは、ジャーナリストたちの抗議にもかかわらず、「記者の証明書を持っていなかった」ことを理由になかなか釈放されない。「代理の案内者を頼んでもパ



ストライカー部隊に侵入した学生たちの解放を訴えるポスター。

ジユ行きは決行する」ことにはなったが、私たちは、はらはらしながイさんの身を案じ続けた。

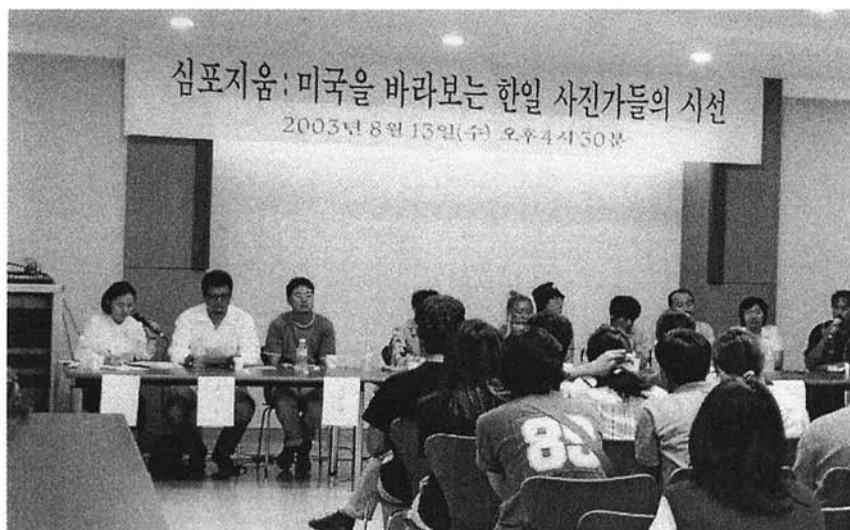
写真展の仲間から「イ・ヨンナムさんが今日の午後釈放された」というメールが大阪に入ったのは、八月十日。八月十三日の写真展オープニングには韓国の写真家五人が全員顔を揃えた。警察の拘束をくぐり抜けたイ・ヨンナムさんには、心なしか古武士のような威厳が備わっているように見えた。

韓国では地下鉄の駅に学生たちが装甲車に乗って抗議する写真を大きく載せたポスターが堂々と貼ってある。「ストライカー部隊事件で逮捕された学生の釈放を求めろ」という内容だった。八月十五日の光復節（日本の植民地支配からの解放記念日）を前に、十二人の行動は反米勢力の一種のシンボルになっているようだった。

パジュは「韓国の沖縄」

十四日、待望のパジュ訪問。市庁舎前でイさんと合流し、「警察の先導つきで」見学が始まった。

パジュ市はソウル中心部からバスで一時間ほどの距離にあ

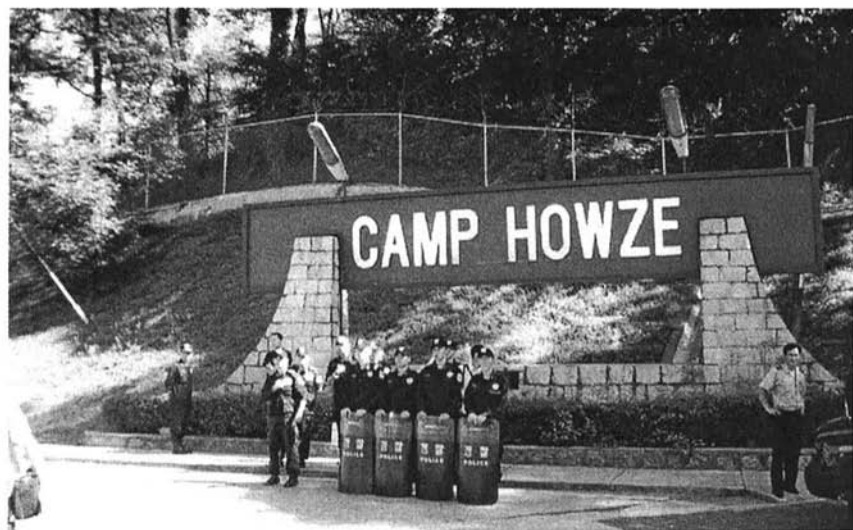


〈記録と記憶のトライアングル〉ソウルシンポジウム

り、北朝鮮との境に近い。面積はソウル市の一・五倍だが、人口は二十三万人でソウルの四分の一にも満たない。にもかかわらず、駐韓米軍の七〇〇八〇%が集中するいわば「韓国^{まさき}の沖縄」である。ここは農村地帯で畑が多い。通訳の大畑正姫^{まさき}さんが「バジユの特産品は何ですか」とイさんに質問したら、即座に「米軍基地だ」と答えが返ってきた。

最初に訪問したキャンプ・ハウズには米軍陸軍歩兵部隊第二師団が駐屯している。そして、ここは昨年六月十三日に十四歳の女子中学生シン・ヒヨスンさんとシム・ミソンさんを轢き殺した部隊の本部でもある。フェンスの上には鉄条網がコイル状に巻かれて張り巡らされているが、これはストライカー部隊侵入事件のあとに、急きよ警備強化のために張られたものだという。この基地の裏門で米軍の高圧電線に感電して昨年六月に亡くなったチョン・ドンノクさん（男性）の場合、米軍は六十万ウォンしか補償金を払わなかったが、チョンさん所有のバイクは八十万ウォンで払い下げたそうで、人の命がバイクより安く扱われたことに家族は悲嘆にくれたという。

基地ゲートの前は盾を持った韓国警察によって嚴重に警備されていた。警察官たちは皆若かったが、彼らは徴兵されて兵役



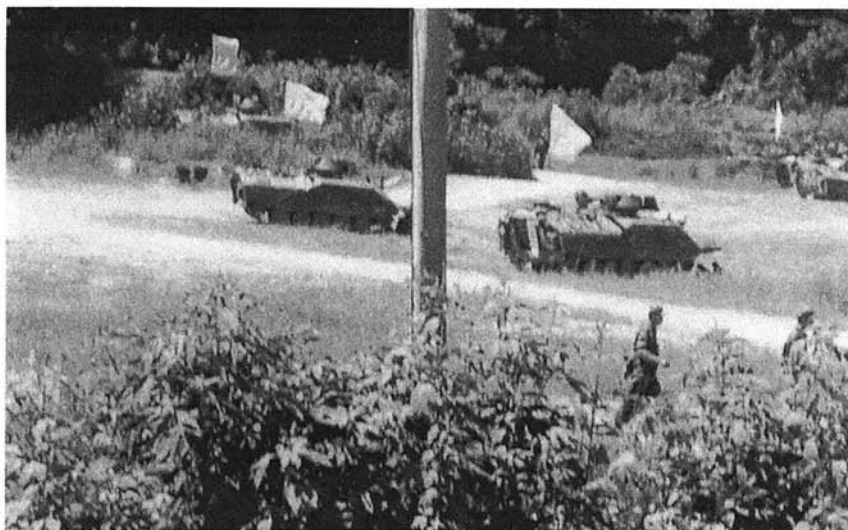
キャンプ・ハウズ正面

義務としてこの任務についているそうだ。

キャンプ・エドワードは昨年九月にトレイラーでパク・スンジュさん（男性）を轢き殺した部隊の駐屯地である。事故発生直後に、住民がまだ息のある彼を病院に運び込もうとしたにもかかわらず、米軍が「こちらでやる」と住民の行動を押しとどめ、結局パクさんは四十時間も放置されて亡くなった。しかもその部隊は、わずか三か月前に女子中学生を轢き殺した部隊と同じ所属であったという

住民の権利や命は、このようにことごとく軽視されていた。一九九二年にはキャンプ・ケリーオーエンから飛んだヘリコプターが隣村の電線にひっかかって火事になり、村が火の海になった。キャンプ・ジャイアントは二〇一一年には移設される計画だが、現在米軍に無償で供与されているこの土地を米軍は売って移転費用にしようと考えているという。

米軍が地元にもたらす経済効果はほとんどなくなった一方、米兵による飲食代やタクシー料金の踏み倒しなどは、日常茶飯事。「韓国は復帰前の沖繩のようだ」と石川真生さんは言ったが、復帰前の沖繩を知らない者の眼にも、そのころの沖繩の状況がまざまざと感ぜられるようなパジュの光景であった。



パジュ市には軍の演習地が多い。

まやかしの慰霊碑

女子中学生轢殺現場は事故後に道幅が広げられたというが、狭くて見通しの良くない緩い坂道で、バスがやとすれ違えるほどの狭い道である。事故当時は道の横の土手が迫って壁のようになっていて、とても逃げられるような状況ではなかったそう。

二人が殺された場所を見下ろすように、昨年九月に米軍第二師団が建てた白い追悼碑が立っている。「私たちはあなたを忘れない。美しい魂よ安らかに……」という碑文がハングルと英文で書かれているが、謝罪の言葉はまったくない。

実はこの碑を建てる時、米軍が兵士たちに建設資金を募ったところ、兵士たちは「なんで我れがお金を出さねばならないのか」と拒否し、建設時期がかなり遅れたという。この碑を、地元では住民感情をなだめるまやかしだと怒っている。住民からは、碑の背後にある山を買って、住民の手で女子中学生二人をはじめ、チョン・ドンノクさん、バク・スンジュさん、一九九二年に米兵に殺害されたユン・グミさんら、パジュとその近辺



米軍が建てた女子中学生「追悼の碑」

で米軍人の犠牲になったすべての人びとの追悼の場にしようという声が出ているそうだ。

道路の向こう側には訓練場が十個所もある。米軍は昼も夜もおかまいなしに訓練を繰り返し、一般道路も使つて頻繁に移動する。轢殺事件当時も、米軍の装甲車は列になつて両車線いっぱいにすれちがっている。逃げ場を失つたヒヨスンさん、ミンさんの恐怖はどれほどのものであつたらう。

交通事故なら現場検証があるのが普通だが、S O F A（韓米地位協定）にはその規定がないために、一般道にもかかわらず警察ではなく米軍の検証が優先になつてしまった。しかも米軍はバク・スンジュさんの事件同様、救急車も呼ばなかった。

やっと住民の手で二人は病院に運ばれたとき、ヒヨスンさんは肋骨が粉々に砕け、ミンさんは頭を割られて歯が粉々という悲惨な状況で、看護婦さんは母親に「遺体を見ないように」と言つたという。

「韓国軍が事故を起こせば罰せられるのに、米軍は法を守らなくても無罪だ。先導車がストップしさえすれば事故は防げたはずなのに」と、イさんは沈痛な表情であつた。

（以下次号に掲載）



轢殺現場はバスがやっとすれ違えるほど細い道

映画・演劇花ざかり

「ナビイの恋」や、テレビドラマ「ちゅらさん」のヒットをはじめ、沖繩を舞台にした映画・演劇ブームが起きている。昨年だけで『ホテル・ハイビスカス』『八月のかりゆし』など六本がつくられ、さらに今年も目下、石垣島と本島北部で制作されている。

どの作品も、南国沖繩の自然、風土、文化を背景に、現代の人間の内面が描かれる。

目取真俊・作『風音（ふうおん）』もそのひとつ。監督は、復帰前のドキュメンタリー『沖繩列島』でデビューした東陽一さん。海風が吹くと海岸の崖（昔の風葬場）に置かれた特攻隊員の頭蓋骨がもの悲しく鳴る。その風音の主にながる恋人や沖繩戦、老漁師と少年、母と息子と夫（虐待、加害者）そして地域で生きるおじい、おばい、数多くの少年たち。——オーディションに受かった人たちが、初めての映画出演に挑んでいる。

芥川賞作家・目取真俊さんの脚本（初）は、彼独特の細や

かな自然描写が随所に散りばめられている。

例えば「サトウキビの緑はみずみずしく、あちこちで滴が輝いている」「大女郎蜘蛛の網に掛かる白い蝶（オオゴマダラ）」「ヒルガオの蔦と花が吹き上げられてざわめき、ガジュマルの枝が波打つ」「若者の全身を覆い尽くした蟹がはさみを動かし、切り刻んだ肉を口に運んでいる」など。原作に忠実に、リアルに表現するため、月や空、海、風などの動きを読み、何時間でも待ち続けるスタッフたち。地元の少年たちも、いつの間にか標準語風に変わっている自分のセリフを言語指導者に指摘されてもう一度、「うちなー」（共通語）に戻っていた。八月三日〜九月上旬撮影終了、来年四月一般公開の予定。

映画と競うかの如く多様に展開されているのが演劇である。

プロではないが四十年の歴史がある演劇集団（創造）は、オリジナル話題作『人類館』をこの十二月に大阪で上演すべく、猛稽古に励んでいる。一九〇三（明治三六）年に大阪で起きた人類館事件が素材。皇民化教育、集団自決などを織り込み、近世沖繩がこうむった差別と偏見を、風刺で

笑い飛ばす画期的な作品。初演（一九七六年）以来、東京、大阪を含む県内外で上演され好評を得てきた。今回の演出は作者の知念正真さん本人だが、出演者は全員新しくなり、純朴で生命感あふれる沖縄の男女をはじめ、調教師などの役づくりに当たっている。十二月に大阪で開かれる勤業博百年祭に招待出演するもので、各方面の期待を集めている。

一方、全く素人の市民劇も活発だ。わが村、町の歴史上の英雄を主人公にした壮大な史劇は、多くが懸賞つきで公募した戯曲の舞台化で、地域の長老格から子どもたちまで総出演する。大がかりな仕掛けや、伝統舞踊、民俗芸能、高校生の創作ダンスを取り入れるなど、文字どおり市民手づくりの演劇による村おこしがいま、花盛りである。

女たちもいきいき

さて、現在、沖縄の女性たちは、文化に負けないくらい元気だろうか。地域における存在感はあるのか。女性たちは人間らしく生きているか。

去る八月三〇日、沖縄県女性団体連絡協議会（女団協）

の歩みをまとめた記念誌『平和・平等・発展を燈しつつけて』が出版され、祝賀会が開かれた。

同会の結成は、米軍事支配下の一九六七年、日本国憲法も諸法律、制度の適用もなく、事件・事故・人権侵害は後を絶たず、生活は不安定だった。女性たちは、祖国復帰協議会に加盟して街頭に出たほか、醤油や新聞の値上げに反対して不買運動を展開、直接交渉を敢行して、生活防衛した。「平和」「暮らし」「福祉」「人権」では全会一致で強力な運動を展開した。その第一次婦団協の時代は一九七四年まで。若干の中断期はありながら第二次「七八年」七八年、第三次「八八年」現在と、国連婦人の一〇年の平等・発展・平和の課題を闘ってきた。当初の婦人連合会、全軍労婦人部、教職員会婦人部、など十二団体から、次第に加盟組織は広がり、現在は三二団体。出版を祝って伊志嶺雅子会長は「女性運動の宝物だ」と述べ、沖縄県の二代目の女性副知事で、沖縄初の女性国会議員となつた東門美津子さんは、「女性への差別発言が相次いでおり、闘いはこれからです」と激励した。記念誌は、本編（四一八ページ）と資料編からなっている。

（桑江テル子）

語りかけたいあなたへ 55

大里知子

「マヨラー」

マヨネーズの好きな人を、「マヨラー」と言うのだそうだ。

何事によらず遅れている私は、「マヨラー」という言葉もつい最近知って、家族に笑われたばかりだ。

私も、マヨネーズ大好き人間である。

野菜サラダは勿論のこと、蟹の味噌をほぐしたものにマヨネーズをかけると抜群の美味しさになる。それから、真っ白いご飯にマヨネーズをかけて食べるのも、けっこういけると思う。でもマヨネーズ、高脂肪、高カロリーなのが玉にキズ。

マヨネーズを十年ほど前までは、なんの憂いも迷いもなく食べていたのだけれど、近頃は、私の

以前の姿を知っている人に会う毎に「少し、太った？」とか「色っぽくなったなー」と、しみじみ言われるので、大好きなマヨネーズもしげんに遠ざけてしまっている。

つい先日は、私より遙かに体格のいい人に「太ったみたい」と、かるく言われてしまって、思わず「あなたに言われたくないな」とノドまで出かかった言葉を、あわてて飲みこんだ。

私が、肉づきがよくなるということは、たんに格好が悪くなるという理由ではなく、毎日抱きあげてもらう身として、たいへん不都合で、悩みのたねなのである。

もう、二年くらい前から何となくおなかの周りが太くなってきて、これではいけないと、夜の食事はお米のご飯を食べないことにしている。

それなのにおなかの周りは、いっこうにスマートにならず、恐怖心をあおられること大である。やせる方法を聞いたら「身体を動かして食べないこと」と、名言を言ってくれた人がいた。でも、この名言も私には通用しない。

なぜなら、私は車いすに乗ったままの生活だからである。

(Eメールアドレス fuusen@beam.ocn.ne.jp)

ら室 ご書 あ読

『声なき声を聞け』

『反戦市民運動の原点』

小林トミ著

岩垂 弘編

(同時代社刊)

六〇年安保で〈声なき声の会〉を呼びかけた小林トミさんは、ことし二月、がんの再発でひっそりと旅立たれた。その遺稿を集録したこの本は、労組にも団体にも属さない普通の市民が、どのようにして反戦市民運動を呼びかけ、広げ、続けていったかを、静かに伝え

る貴重な記録である。

「それは、こうしてはじまった」「無党無派の反戦・反安保」に始まる気取りのない文章は、日米新安保条約の強行採決を果たした岸首相の「在日米軍への攻撃は日本人への侵略とみなす」という答弁に、「日本はアメリカの先兵になって、またしても中国やソ連との戦争に巻き込まれるのか」と、思わず国会請願に駆けつけ、〈誰でも参加できるデモ〉を実行した経過を、淡々と、しかし的確に伝える。

その内容に惹きこまれ、読み始めて三十分もたたないうちに、一冊の半分を読み終えていた。

一九六〇年は、戦後十五年。戦争の傷がまだ人びとの胸にも深かったからだろう。〈安保〉は〈参戦の道〉と誰の胸にも響き、国会請願へ、あらゆる立場の人が列をつくった。

しかし「運動」と言えば労組を中心にしていた時代。無所属市民は、思い

があっても二の足を踏む。

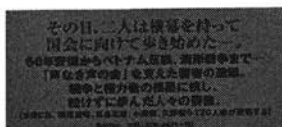
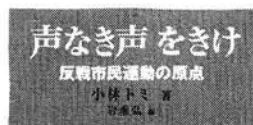
思想の科学研究会傘下のサークル〈主観の会〉に入っていた筆者たちは、材木屋でベニヤ板と角材をもとめ、四メートルのキャラコに、「総選挙をやれ!!」「U2機帰れ」と大きく書き、空いた部分に〈声なき声の会〉と記して歩き始める。

〈声なき声〉とは、岸首相が連日のデモを皮肉って「いまあるのは『声ある声』だけだ。私は『声なき声』にも耳を傾けなければならぬと思う」と挑発したのを逆手にとつての命名。その名が路傍の人を次つぎに誘い込み、全国あちこちに〈声なき声の会〉が自然発生。機関誌『声なき声のたより』は、一号三千部から出発して、後には万を超えるに至る。

ここから生まれた〈政防法反対市民会議〉は、〈政防法をせき止める会〉に育ち、会費百円で、これまた全国に会友が広がる。

「私たちは自分の思っていることを自分の言葉で言いたいのです。新聞や労働組合のできあいの言葉ではなく、たとえ幼稚でも、自分の身についた日常の言葉で考えて、じかに表現したいと思うのです。それがデモというものではないでしょうか」。

「私たちはお互いに約束をして、それをまもる。指導者におぶさることをしない。わからないこと、おかしいことについては、自分の考え方を捨てずに出発点に戻ってもう一度考えなおす。政防法のことですんだら解散する。賛成の方はいっしょにやりましょう」



入会のピラのこの精神は、後の（へべ平連）に受け継がれる。無党派市民運動の原点だろう。

六〇年安保が、なぜあれほどのひろがりを見せたのか。さまざまのグループを組み込みながら、あの熱気はなぜ続いたのか。淡々とした実録を読みながら、何度もうなずき、考えこんだ。会は、多くの知名人を巻き込み、事務局責任者にも高名な人が就いたが、より高名な会の事務局長に転身。彼はやがて渡米する。

やはり自分でやるしかない、「声なき声は私がやるわ」と思わず言ってしまった小林さん。その夜はねむれない。

「でも誰もやらないなら自分でやろう。飽きつぱくはないのが私の特徴。見栄をはずかに自分のできる範囲でやろう」と思い直し、ついに終生それを貫く。

記述は、一九九〇年の湾岸戦争反対で終わっているが、反戦市民運動の底辺を支えた小林さんの明るさ、つよさ

に、厚さ二センチの本を息もつかずに読んでしまった。

「声なき声の会」は、すばらしい」という話はたびたび耳にし、小林さんの真つすぐで、しかも芸大出らしいクリエティブな発想も伝え聞いていたが、この本を読んで、小林さんのご在世中に会にも入り、ご本人からも学びたかったと、嘆息した。

遺された原稿は一、二四〇枚。どれにもノンブルがなく、順序も不同だったという。その重い一、二四〇枚を繰り返し繰り返し読んだ岩垂さんの、誠意と熱意と愛情がなければ、書籍にはならなかっただろう。

文中には多くの知名人も、ありのままの姿で登場する。戦後市民運動史としても、この上なく貴重な記録。市民運動に関わるすべての人に、心からすすめたい。

（〇三年六月刊。四六版、二二一ページ。一九〇〇円＋税）

（千）

「韓国の若者を知りたい」

水野俊平著

(岩波ジュニア新書)

韓国の人気テレビドラマ『冬のソナタ』がNHK衛星放送で放映され、現在大ブレイクしています。日本のアイドルも大人気。昨年のワールドカップ以来、日韓の若者カルチャーの相互乗り入れは加速度的に進んでいるようです。

ところで、実際の韓国の若者たちは、どのような日常生活をおくり、どんな価値観を持っているのでしょうか。本書の著者、水野俊平氏は三十代。韓国光州市在住。全南大学の講師を勤めるかたわら、テレビの人気番組にコメンテーターとして出演中。この本では学校生活、対日感情、韓国人と日本人の違いなど、韓国の若者の「いま」を多角的に分析しています。

韓国の学校制度は日本とほとんど変わらない六・三・三・四制ですが、進学熱が日本に輪をかけて過熱気味で、高校生は朝六時に登校して、夜十時、十一時まで学校で勉強するのが実態。大学入試には一、二年生が受験生応援団として試験会場につめかける!というのも日本では見られない光景です。

苦勞して入った大学ですが、男子学生が通る関門が国民の義務である「兵役」。もし拒否したら「刑務所行き」という厳しいものです。大学を二年間休学して行くのが普通ですが、学業を中断するので復帰したあとが大変という意見が多い。それでも「男はやはり軍隊へ行かなければ」という風潮は根強く、韓国は、いまだに戦時下なのだなあ……と感じざるをえません。

韓国の若者たちは日本の若者に対して「自分のことを話したがない」「歴史に無知」というマイナス印象を抱いている反面「約束を守る」「意外と親

切」などプラス印象も持っているそうです。

日本のテレビアニメやゲームに影響を受ける一方、植民地支配を直接受けてはいなくても歴史的体験はしっかりと受け継がれている。だからこそ対日感情は「複雑で屈折」したものになっている。日本の若者はこの点をしっかりと理解して、韓国の若者と向き合う努力が必要です。

この本の結びにある「韓国人とのつきあいかた」を読めば、きっと「韓国人の友だちが欲しい!」と思うでしょう。十代二十代の若い人たちに、ぜひ読んでほしい「韓国入門書」です。(あ)(新書判二二ページ 七八〇円＋税)

◆この〈読書室〉で取り上げてほしい本を、事務局までお送り下さい。書評と一緒につけて下さっても結構です。採否は、お知らせします。新刊以外でも結構です。

日本政府は遅れていると国連が指摘

国連の女性差別撤廃委員会は、日本政府の女性差別撤廃条約実施状況を調査、八月九日、「男女共同参画社会基本法」などは評価する反面、「意思決定過程への女性の参画の低さ・婚姻最低年齢の男女差・婚外子差別などの差別的扱い」について、強い懸念を示すとともに、日本のNGOがかねてから要望していた「女性差別撤廃条約・選択議定書の批准」も急ぐよう、日本政府に強く要請。

この秋も世界共同平和行動

イラク攻撃阻止へ向けて、この春、全世界は史上初の大規模デモを繰り返し行なったが、それに続くものとして、九月二七日（土）午後一時から「米国のイラク占領に反対す

るワールド・ピース・パレード（WPN）」が、世界十五か国以上で挙行される。日本では「イラクへの自衛隊派兵反対」の意思表示も含めて二時から東京・芝公園二三号地（御成門駅下車七分）でライブとトーク。三時からパレード。

連絡先はWPN実行委（〇三・三三二一・四六六八）

女子の大学生百万人時代に。就職率は過去最低

文部科学省の〇三年度学校基本調査（八月八日発表の速報）によると、女子の大学・大学院在学者は三八・八%（一〇八万七〇〇〇人。大学院生も二八・六%（二三万一〇〇〇人中六万六〇〇〇人）と、実数も率も、共に、過去最高に達した。

その一方、高卒の就職率は男子（一八・五%）、女子（一

四・七％）と男女共に過去最低。大卒は男子が五二・六％で過去最低なのに対し、女子は五八・八％で前年より下落。

女子が比較的活躍しているのは教員で、小学校六二・七％、中学校四〇・九％、高校二七・一％。ただし校長と教頭は、小学校で一七・七％と二二・〇％、中学四・三％、と七・五％、高校で四・七％と五・一％という低い率。

官公庁女性職員の採用状況調査

人事院は、今年五月に調査した各府県二八機関の女性職員の採用・登用拡大状況を、七月一八日公表した。

採用予定で女性の割合が増加した機関数は、Ⅰ種試験採用者は九機関、Ⅱ種は一四、Ⅲ種は一三。登用は、係長級で一九、課長補佐級で一四増加したが、準課長以上では増加は五機関だけで、逆に七機関では減少。結局、増えたのは「係長中心」という結果になった。

登用拡大に向けた具体的な取組みでは、「幅広い職務経験の付与」と「研修機関の確保」という基本的なテーマが共にトップで二六。採用・登用の拡大を推進する上での課題は、「転勤」と、「男女共同参画に対する職員の意識変革」

で、女性の働く場としては最も優遇されている官公庁でも、まだまだ初歩的な問題が解決されていないことを示した。

学術会議の女性役員は依然として少数

日本学術会議は、同会議に登録する学術研究団体一四八を対象に、会員と役員に占める女性の割合を、初めて調査、発表した。

全体では女性の会員は一六・七％に達したが、役員は七・五％。七つの部ごとに比率を見ると、最も少ないのが、第五部（工学）で、会員三・三％、役員一・二％。最も会員が多い第一部（文学・教育・社会・史学など）でも、会員三四・七％に対し役員は二三・二％とまり。女性会員が二二・〇％を占める第七部（医・歯・薬学）も、役員は六・〇％と、旧態依然の「白い巨塔」ぶりを示した。

国連、戦時下性的奴隷制に補償を要求

国連の人権補償促進小委員会は、八月一四日、戦時中の組織的レイプや性的奴隷制について、各国政府に、補償や

罰則、人権教育の推進を求める決議を採択。来年の同委員会までに、訴追や犯罪捜査など司法面に焦点をあてた調査報告をまとめることを決議した

この問題は、九三年以来、日本の従軍慰安婦問題を端緒に議論され、世界のNGOの厳しい追求によつて決議に至つたもの。日本政府も、真剣に、誠実に、問題解決に対処せざるを得ない。

熊本・牧師セクハラ裁判、結審

教会の牧師が女子職員を二年にわたりセクハラ。被害者が〇一年に提訴した事件(二七七号で既報)は、七月一〇日結審。十月七日に判決が出る。(四四ページ参照)

今年も盛況(女性学・ジェンダー研究フォーラム)

毎年女性学の研究者で賑わうヌエック(国立女性教育会館)の夏の行事、女性学・ジェンダー研究フォーラム。今年は八月二二〜二四日(日)の三日間、「二一世紀の男女平等・開発・平和——わたしの権利」をテーマに一〇四のワ

ークシヨップが開かれ、一、七三三人が熱心に討論。しかし一〇四ものワークシヨップで、平和は城西大学の「ジェンダーと平和」だけ。「情報のひろば」での『あこら』の販売も、平和関係は、ほとんど売れなかった。

板東真理子さん埼玉知事選に挑戦

埼玉県の副知事から内閣府男女共同参画局初代局長に就任、男女共同参画に力を尽くしていた板東真理子さん。八月の埼玉知事選に立候補、最初は断トツと予想されていたが、民主党ほかの推せんを断り、無所属に徹し、(WINWIN)〈あこら埼玉〉、地域婦人団体などのボランティアとカンパだけに頼って「選挙が変われば政治が変わる」と理想選挙をたたかった結果、四位で落選。

なりふりかまわず訴える板東さんを支えようと、事務局にも街頭PRにも女性たちがつめかけ、夜は事務所の机の下でゴロ寝という献身的な応援を続けた熱意が実を結ばなかったのは残念だった。

棄権六四%という最低の選挙民意識の中で、ジェンダーは、まだまだ票に結びつかないという嘆きも聞こえたが、

せっかく「知事」を志した板東さん、ぜひ次の機会に政治家として、デビューしてほしい。

なお、板東さんの出馬で空席となった局長職には、大学も男女共同参画室長も後輩の、名取はにわさんが就任した。

山口県初の女性町長、当選四か月で引責辞任

「あこら」二八六号で既報した、原発推進をとなえて四月に当選した山口県上関町の町長、加納篠香さんは、町長選をめぐる公選法違反で後援会長が有罪判決を受け、引責辞任。就任四か月足らずで県下初の女性町長は姿を消した。

惜別 渡辺喜美江さん

北富士演習場入会権の返還を求めて、六〇年に父忍草母の会を結成、六五年以来、常に先頭に立って着弾地座り込みやハンストを続けていた渡辺喜美江さん。現地ではもとより、銀座などの街頭デモでも常に先頭に立って活動してあられたが、七月二八日、九七歳で逝去。

理戦 74 2003 Autumn

定価 1143円＋税

特集◎リチャード・ローティ

- ◎アブノーマル・フィロソフィーへの挑戦 野家啓一
- ◎民主と愛国」のフラグマティズム 仲正昌樹
- ◎リチャード・ローティを脱構築する 橋本 努
- ◎フラグマティズムの系譜 宮寺晃夫
- ◎「徴候」としてのリチャード・ローティ 北田曉大
- ◎リパタリアンが見たローティ 森村 進
- ◎左翼に託された現実変革の希望 荒 岱介

インタビュ 破天荒な人々 荒岱介が聞く

第2回 前之園(旧姓・花園)紀男さん(元赤軍派活動家)
この門より入るものはあらゆる怯懦を捨てよ

「奄美諸島復帰50年に寄せて」

◆人・自然・神が織りなす悠久の島々 谷川健一

◆ネオコンの正体は文化的多元主義者 宮台真司

◆フセイン政権後、液状化するイラク情勢 田原 牧

◆「連戦」現代世界の危機とアダム・スミス 田中正司

◆最終回 再生への道——再建の前提条件 府川充男

◆印度散人曝書録・五 久住 純

◆アクティビストにとっての文学? 豊田直巳

◆グラビア 空爆後のイラク

実践社

〒335-0002 埼玉県原市塚越2-18-6
Tel. 048(431)1804 http://www.jissensha.co.jp/

2003年10月4-11日

平和な宇宙をいつまでも

宇宙の軍事化を止めるための
国際行動週間



今夜、空を見上げてごらんさい。

きらめく大都市の明かりで

壮大な空はかすんでいます。

それでもなお宇宙は生きとし生けるものすべての共有財産です。

強大で攻撃的な国が、死と破壊をもたらす兵器や軍事施設と、有毒な原子力を宇宙に配備して、宇宙を汚そうとしています。

宇宙はかれらのものではありません。声をあげよう。意思を行動に表わそう。

原初の宇宙を守ろう。

宇宙の兵器と原子力に反対するグローバル・ネットワーク

Global Network Against Weapons & Nuclear Power in Space

Tel: 1-(207)729-0517 www.space4peace.org

日本の連絡先: プルトニウム・アクション・ヒロシマ

Tel/Fax: 062-828-2803 Email: dogwood@muc.biglobe.ne.jp

あいらの運営委員を募集

「どの部門にも長を置かない」ことで三十二年運営してきた『あいら』。長年深く関わってくださっている方を中心に、年一回の運営会議を続けてきましたが、今後の存続問題もあり、改めて運営委員を募集します。

グループとしての〈あいら〉のあり方や、雑誌『あいら』の内容について忌憚のない発言（メールやFAXでも可）をして下さる方であれば、どんなでも。ただし報酬はありません。

この会議は、はじめ北海道から九州まで全国各地で開催、楽しい集いでしたが、メンバーがそれぞれ超多忙になり、経済的にも余裕がなくなったなどで、最近の何年間かは名古屋で開催しています。（昨年は三〇年記念の時に開く予定でしたが、それぞれの都合がつか

かず中止。交通費は、相当額のBOC

出版物（希望のもの）をさしあげます。

広告をのせてくださいませんか

会員価格で一ページ三万円、半ページ一万五千元、三分の一、一万円です。

事務局の助っ人急募

スタッフの一人が入院することに。事務や雑用の好きな方。助けてください。時給千円以上。交通費全額。〇三—三三四—三九四—へお電話を……。

【編集後記】

◆この号は掲載希望が殺到。あいらのあいらのスペースも一ページに。嬉しい悲鳴ですが、（会と催し）（目次に見る三十年）その他が休載に。申しわけありません。次号もステキな記事をお

待ちしています。

(N)

◆一人ひとりの灯は小さくても。みんなでもせば、世界はまばゆいばかりです。きつとー

(W)

◆冷夏から暑秋へ。ヘンな世界、ヘンな日本を象徴するように、気候もヘン。欧州は猛暑だったとか。それでも涼風が吹き始めました。『あいら』にも涼風を、と思いながら、なかなか刷新ができません。

(K)

◆カッター一枚、写真一枚でも送ってください。もちろん飛びきりの原稿もお待ちしています。

(R)

◆寺沢上人のお話、バクダード最後の日に、市民が町を花で飾った、というところで、思わずナミタが。

あの心やさしい人びとの国に、いま強盗・殺人が……とは、何ともザンネン・ムネンです。

(千)

〈あごろ〉は、人と人が出会うつひろば――

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌『あごろ』を軸に、よりよい自分と社会を目指す ゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変えろ――「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊『あごろ』の誌代込みで月額七百元。一年前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は二千元。ハガキ・FAX・メール・電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

〈BOC〉のご登録も、どうぞ……

一九六〇年に生まれた〈BOCバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ただし、半年以上〈あごろ〉会員の方に限ります。

連絡先

〒160-0022 東京都新宿区二一九-4 中公ビル
電話 03・3354・3941 (代) FAX 03・3354・9014
Eメール XVL05467@nifty.com または boc@mb.infoweb.ne.jp
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agoral/>

あごろ 287号(9月号) 今こそ灯をともしよう

●発行 2003年9月20日

●編集 あごろ新宿

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4 中公ビル

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-MAIL XVL05467@nifty.com

●定価 本体930円+税 ●振替 00100-0-5264 BOC あごろ編集部



9784893061355



1920036009305

ISBN4-89306-135-6

C0036 ¥930E

〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4

定価 本体930円＋税

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 FAX3354・9014

E-mail XLV05467@nifty.com

各種プランニング
各種調査
取材・撮影・編集
校正・デザイン・レイアウト
各国語翻訳その他

男女共同参画の
BOCシニアも
スタートしました。
ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

「ご自分の本」を出版なさいませんか？

「女性学」「女性としての歩み」「戦中・戦後の生活」「家族の肖像」その他……
論文・エッセー・句集・歌集。どんなテーマ、ジャンルでも、どうぞ。

◇ 個人でもグループでも歓迎。原稿を拝見、アドバイスして単行本にします。

◇ 東販・日販その他取次店の口座もありますので、書店での販売もできます。

◇ ご予算をお知らせくだされば、その範囲で製作します。費用は、市価よりも
お安いと思います。とくに感銘を受けた原稿は、当方で製作費を負担します。

◇ 編集は、ベテラン編集者が担当します。

◇ ご連絡は下記へ。一九六〇年創業の、誠実と創造の出版社です。

〒160 東京都新宿区新宿1-9-4

TEL 03-3354-3941 FAX 03-3354-9014

E-mail XLV05467@nifty.com

サイレントマイノリティのBOC出版部